



博麗神社の Hな拍木合同

DOJIN
R18
成人向け

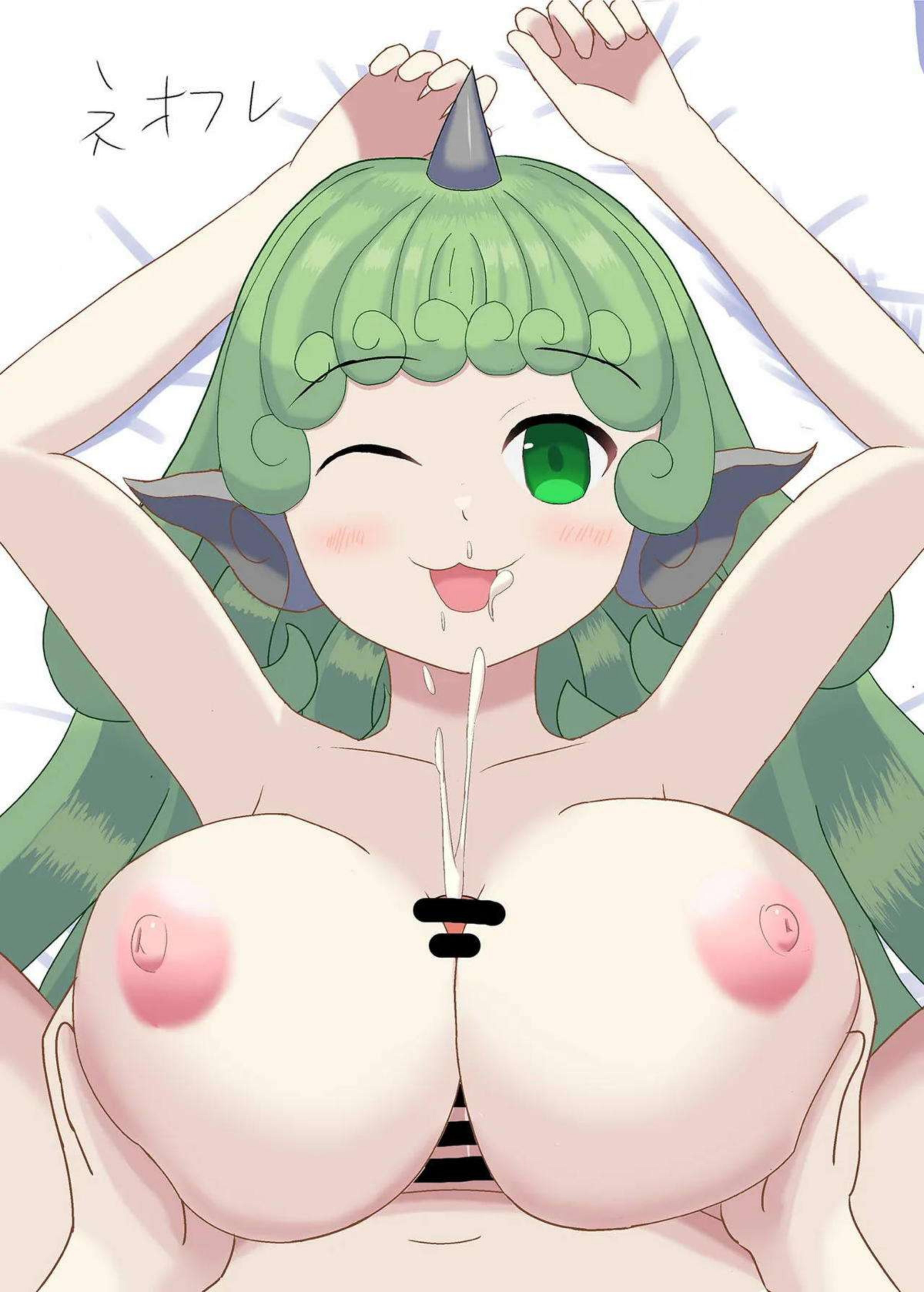
18歳未満の
購入・閲覧禁止

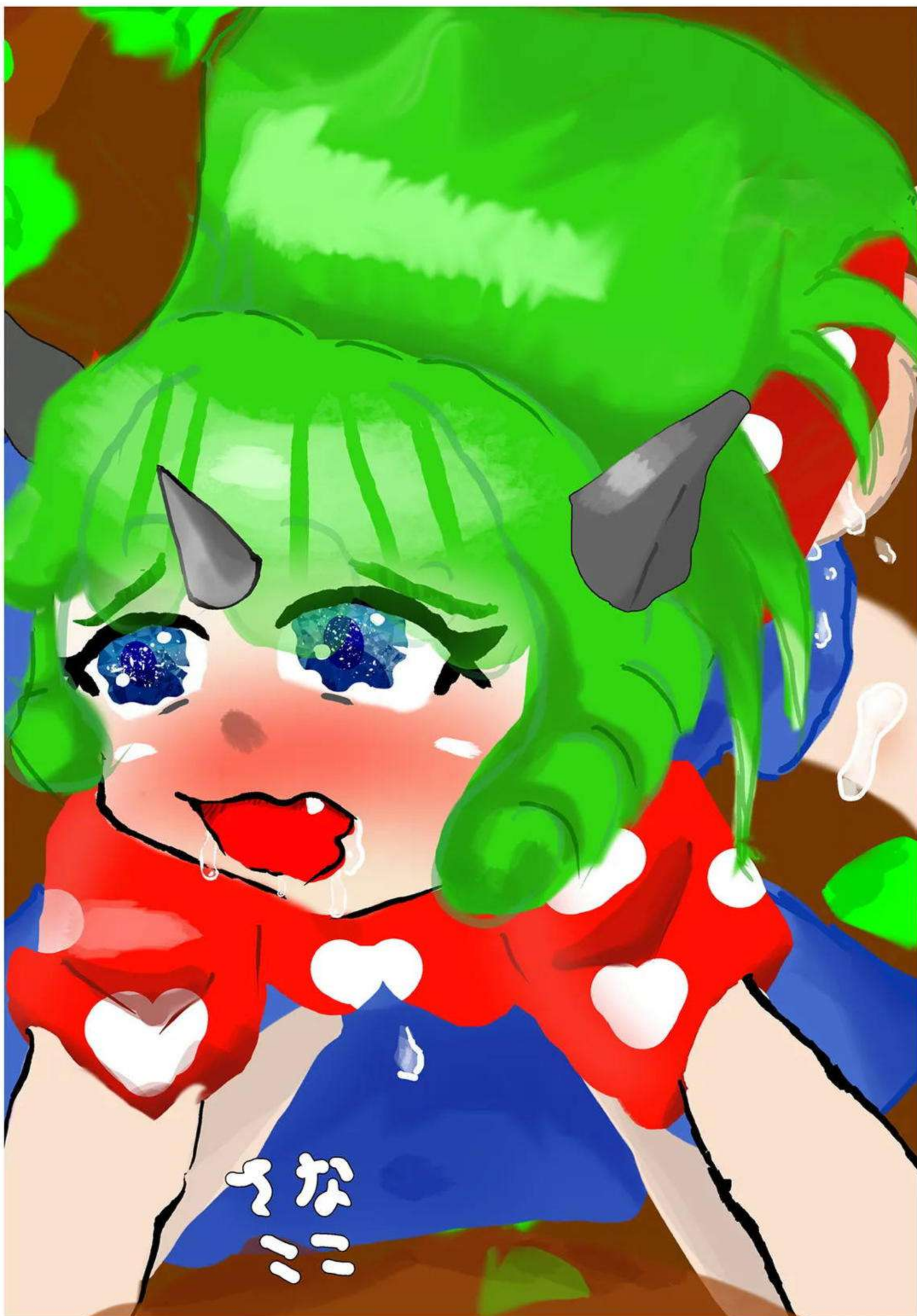
あっ！　こらあうん！
もう……こんな……っ！
こんな恰好で……
寝て……っ！！
も、もう……っ！





い
え
お
つ
レ





まな
こ





霊夢さんに近づく悪い人はお仕置きです！

私二人分相手にできなければ霊夢さんに
会うことも叶いませんよ？♡

A







え えへへ...♡

今日も

待てですか.....?

おんちゃんおめしけ部

ぴあき

ツ~~~~♡
うああ
せ精子でるッ……!!

な中につ♡
中に出してっ
くださあいッ♡

いいいの!?
やった!♡



理性を 狂わせる程度の 痴犬

ふたなりクラビと
襲われあうん

Author's signature

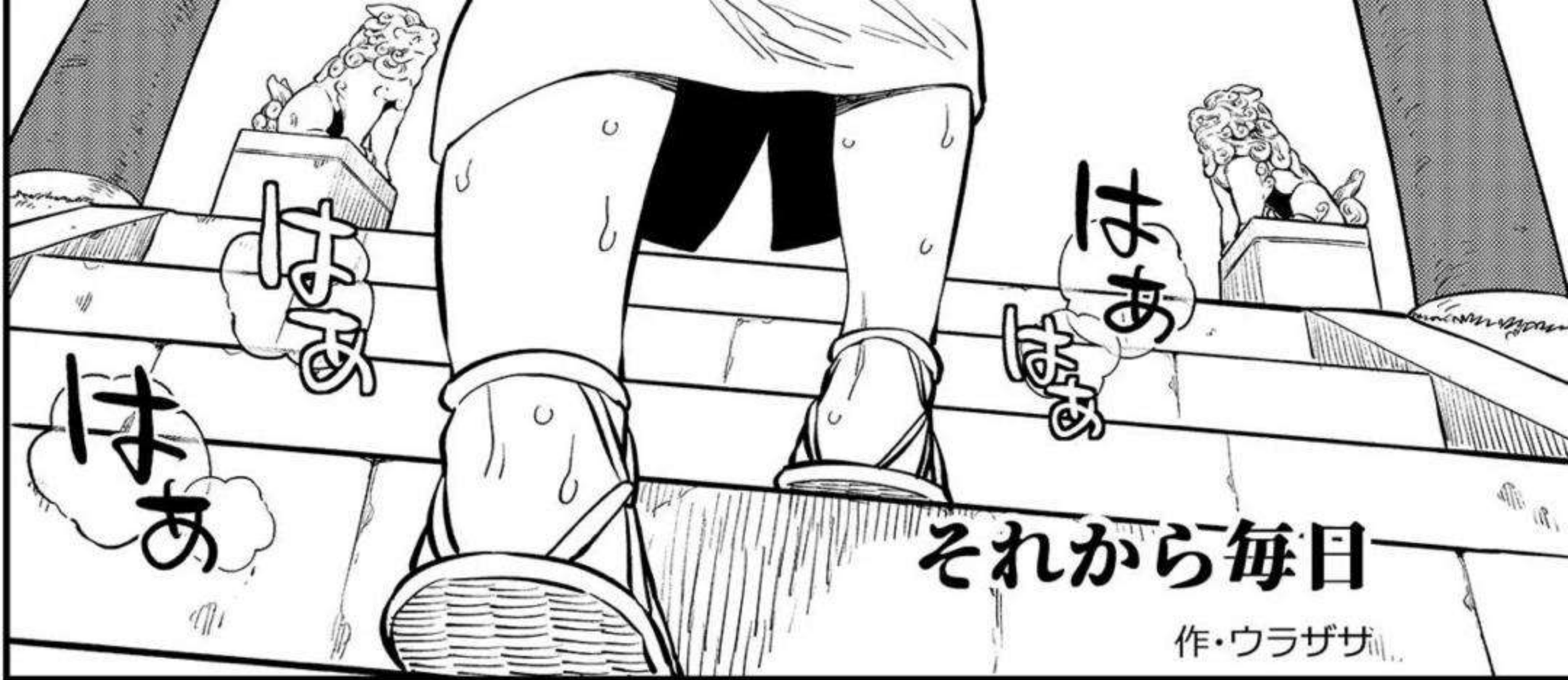
サークル：無色酒
作：しろわいん











24



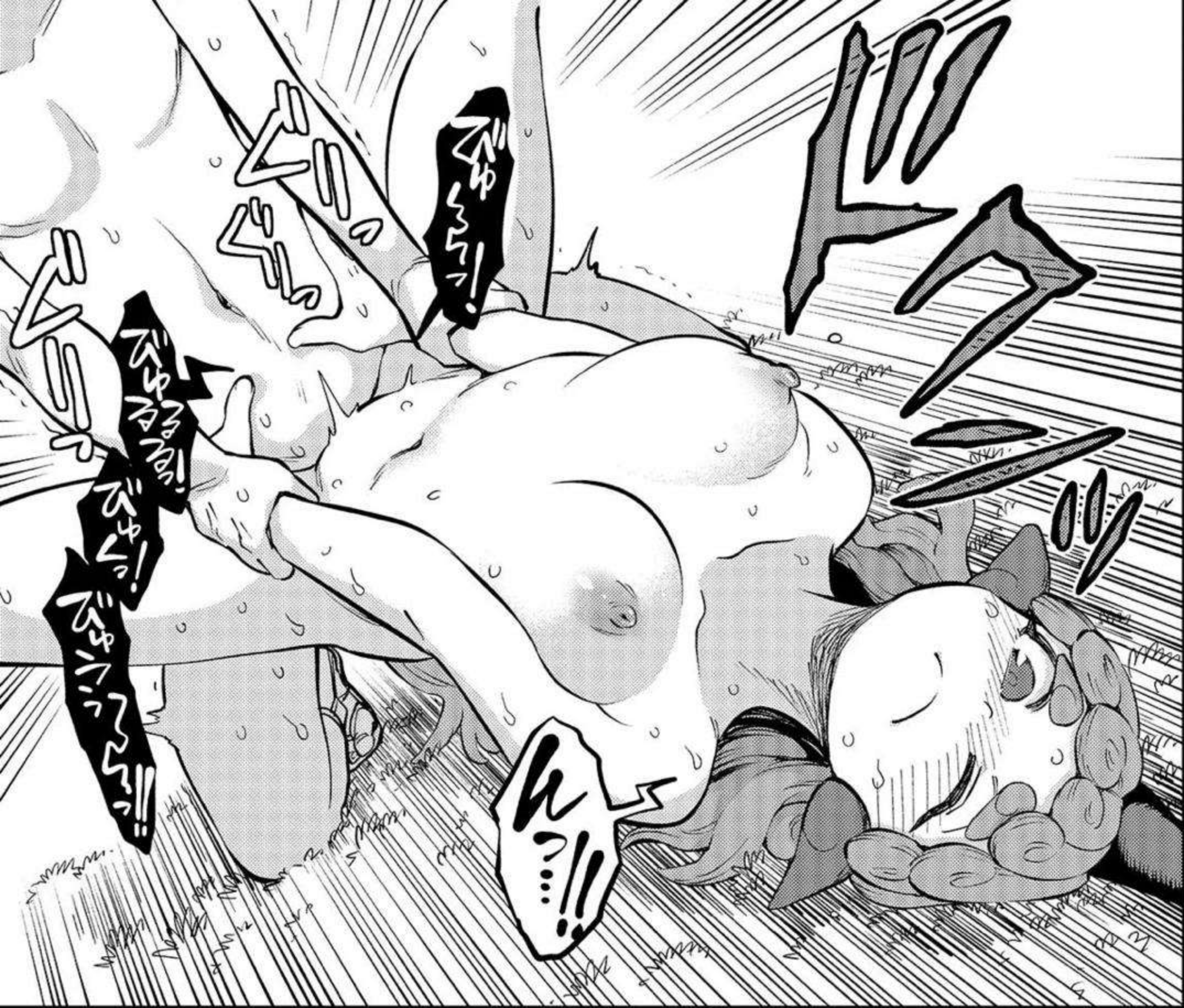






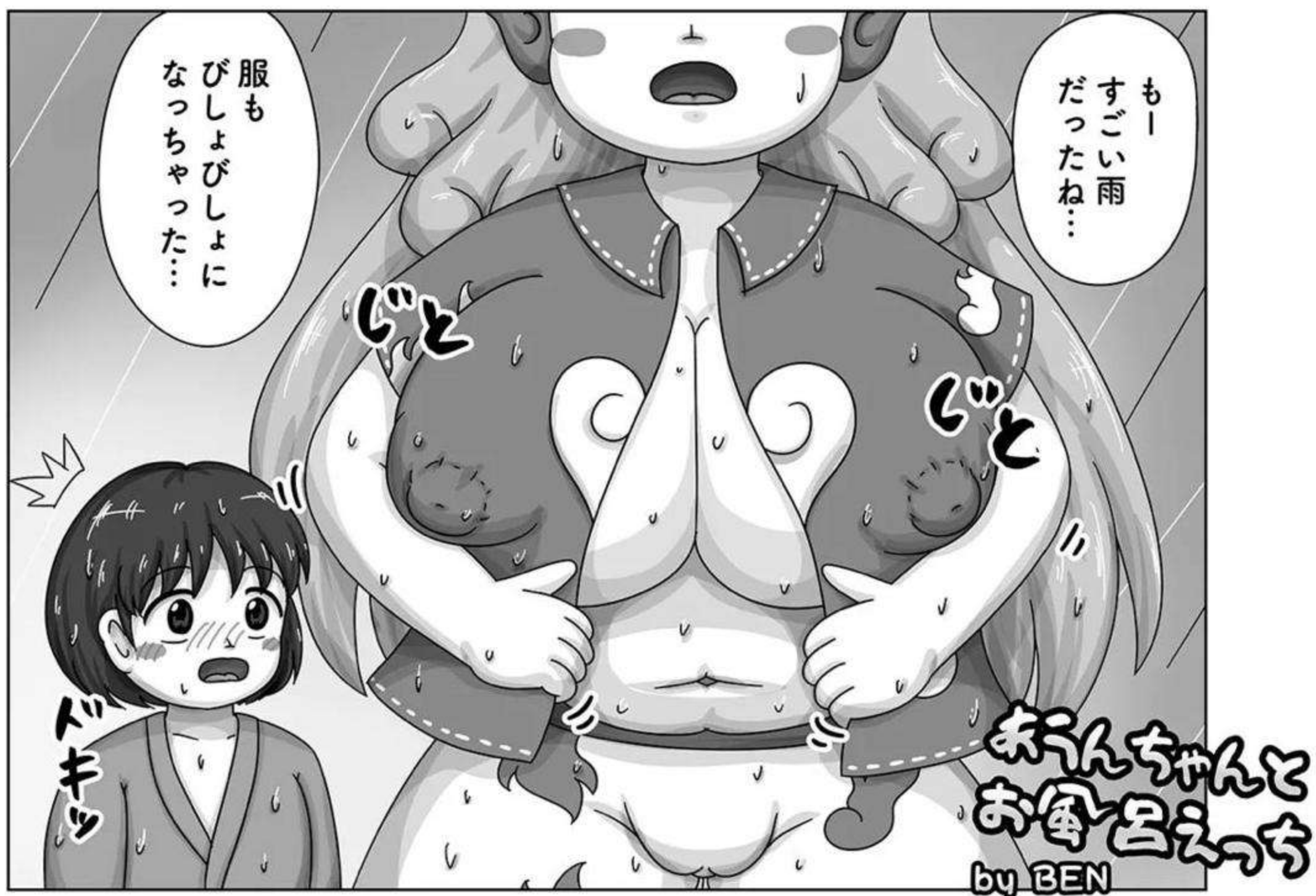
28





29





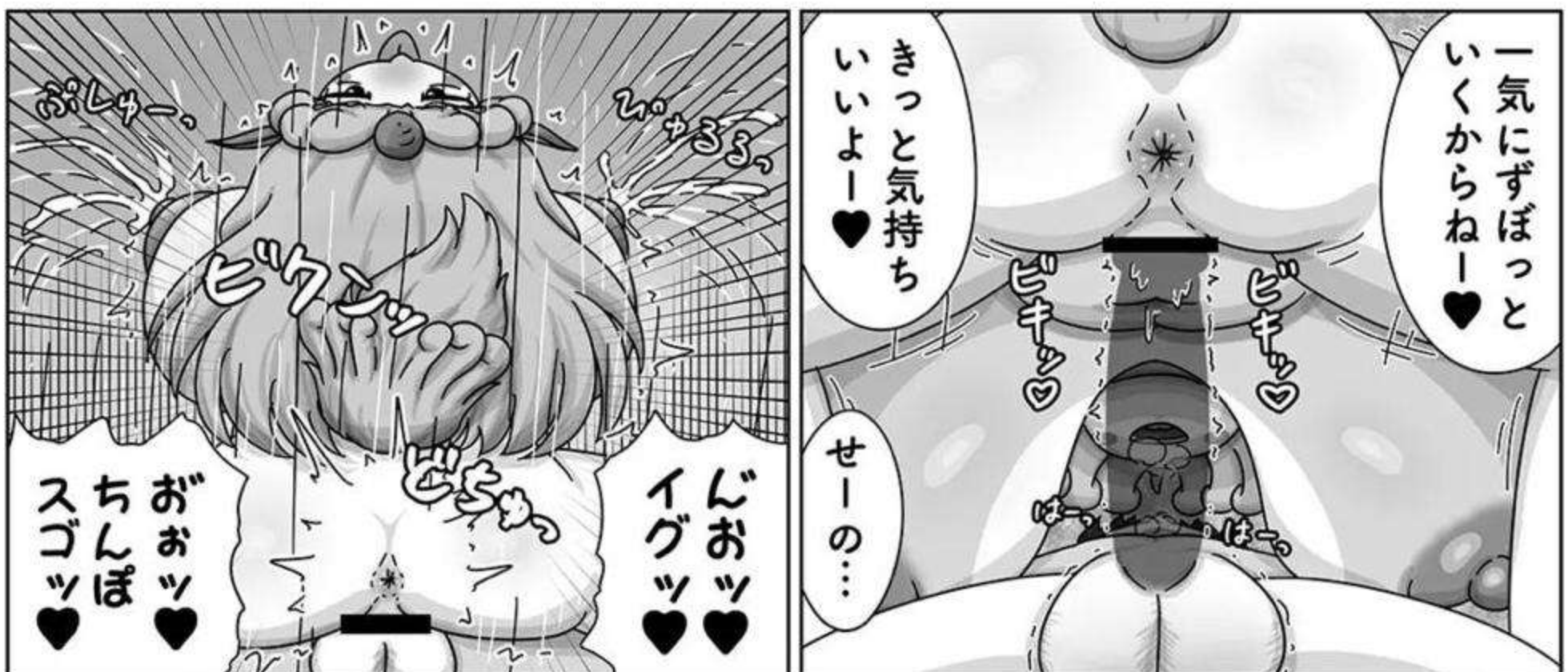


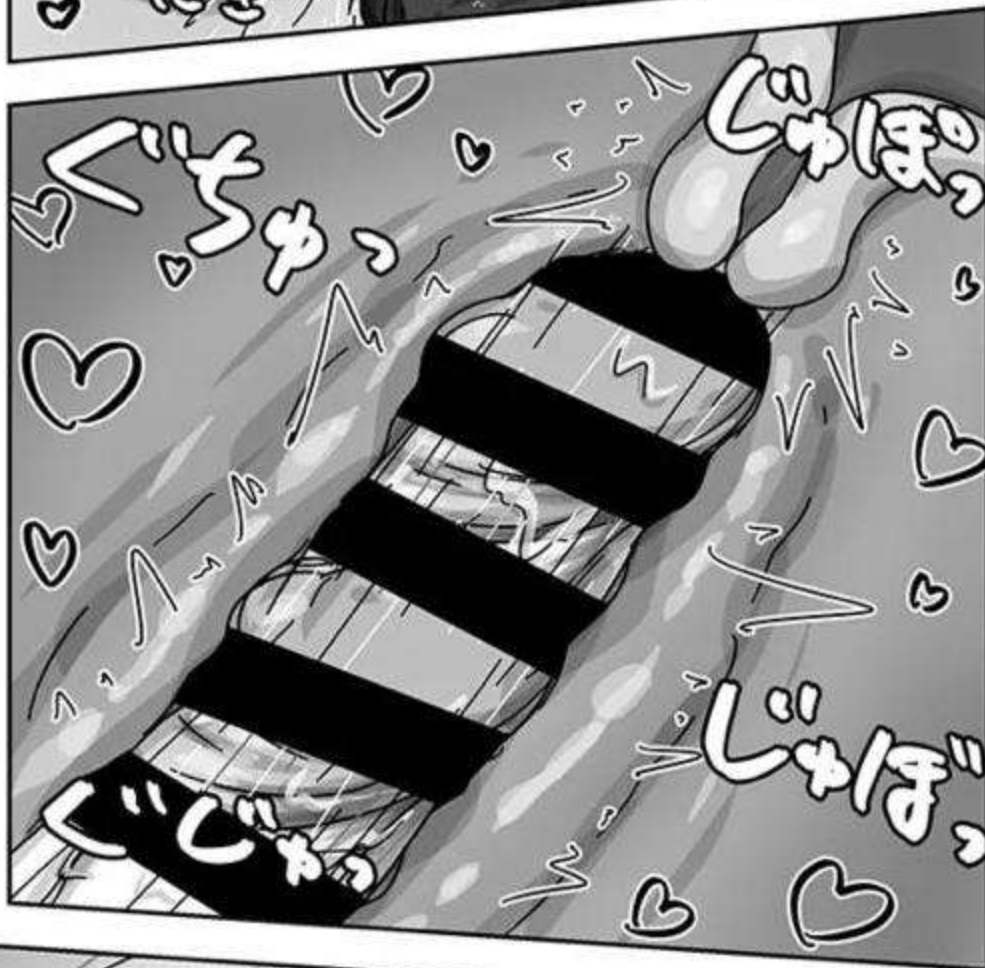
31



※うちの幻想郷では一般的なサイズだよ
どこにでもいる普通のかわいい子供ちゃんだよ







こいつは阿咩ちゃん。
見た目は女の子なんだけど
犬みたいというか犬だな。
狛犬ってやつだ。

人の言葉は解ってる感じだが
どうやら喋るのは出来ないらしい。

俺がこの神社に配属されたときから
ここに居ついてた。なんでも
先代の巫女の式神なんじゃないかって話だ。

奉

奉

俺がここに来た初めての夜、
このわんこ、「一緒に寝ましょう！」
と言わんばかりに枕を持ってきた。

故に無防備。
このだゆんだゆんの
体を前に自分を制する事など

今まで先代の巫女たち
としか寝たことないであろう
むちむちわんこ。

できなかつたー

あうんちゃんとし
みみちえっち♡
ぱにぱに



朝まで肉をぶつけあった。

ベグ
ー!!

あー
でる
でる
射
精
る
!!

はあ!!
はあ!!

少女帰宅中…

博麗の巫女は
疲れていた

おかえりなさい霊夢さん！

ガラ…

!?

今日もお疲れさまでした！

まずはお風呂にしますか？
ご飯にしますか？

それとも…わ・た・し？

その…家の主人の出迎えに
こういうのが流行ってるって

気に入って…
いただけましたか…？





わあ
すごい顔になってますよ

「いいからさっさとやらせろ
ですか？」



さあ霊夢さん♡

お次はどのように
癒して差し上げましょうか？

ってあっ…
折角のエプロン…

これじゃいつもと
変わらないじゃないですかあ









今日のお勤めは
分身ちゃんに任せて
あるんでしょ？

こんなこと
私に知られたら
顔向けできない……！



今日はあうんちゃんの
仕事ぶりをみながら
楽しもうよ♡

ホラ あうんちゃん
お尻こっち向けて

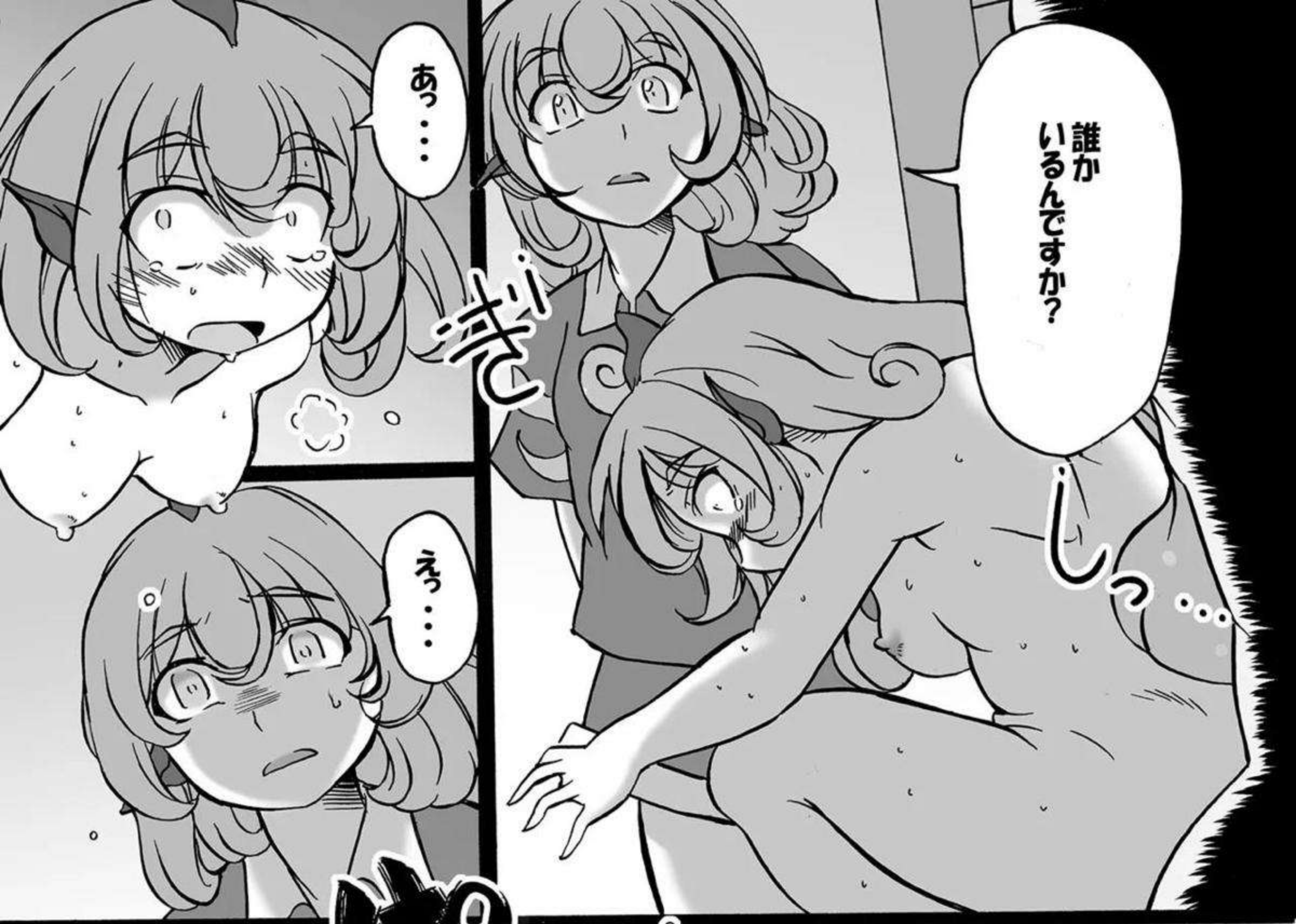


大声でしたら
あうんちゃんに
バレちゃうよう？

ひきこ

くはあ……♡









はあ

いす

はあ

はあ、
わるいわるいわる
つい熱くなっちゃった
でもまだ
こんなもんじゃ
ないでしょう？
はあ

どうも♡



まったく
私にかくれて
私と
こんなこと
して

はあ

ずるいじゃ
ないですか

ここからは…

二人がかい
ですよ♡

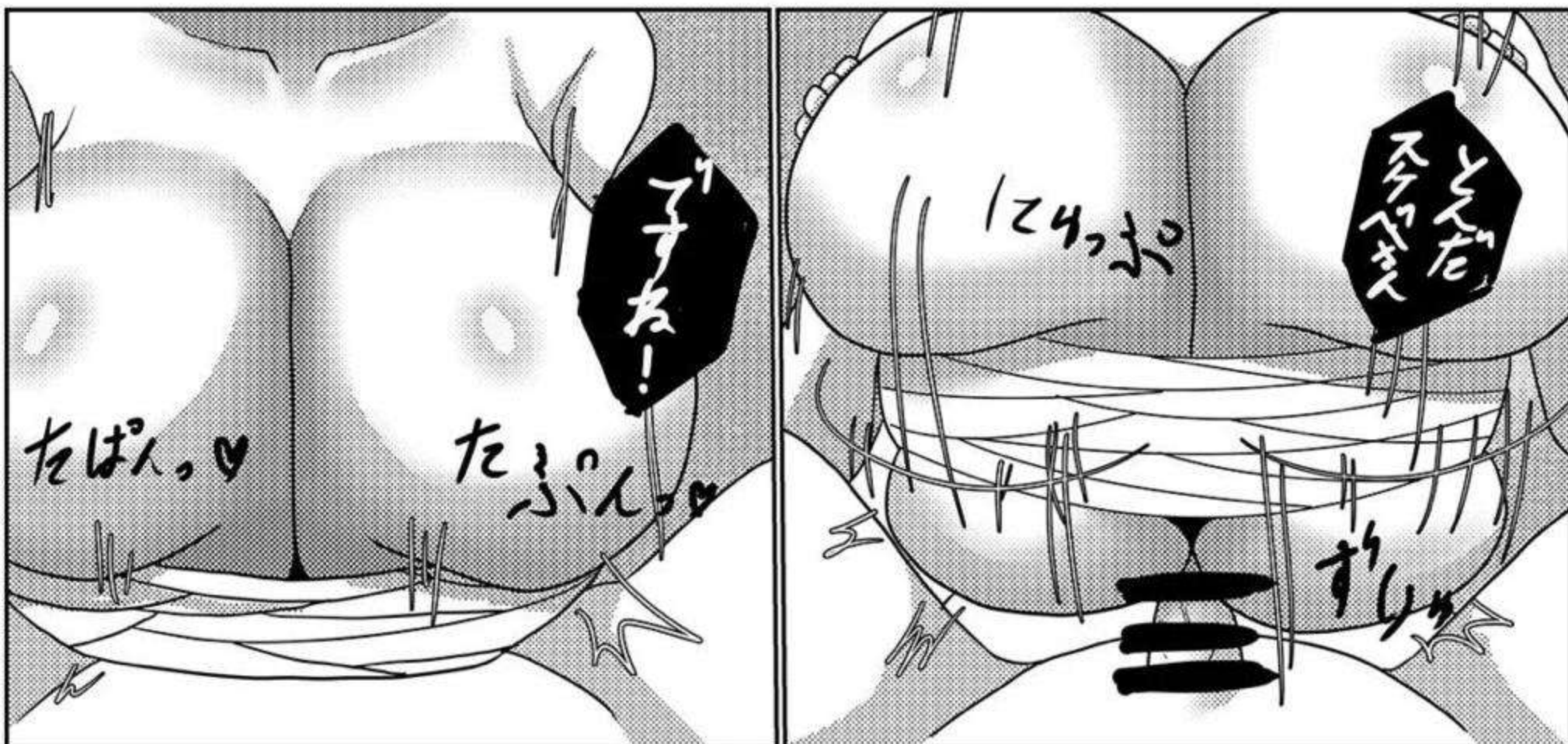
たけ

……ふえ？





あうんちゃんに
パイズリおねだり
作者：虚無





満月の
夜は



しからだが火照って
しょうがない…

はあ

はあ

はあ

フツ

あ

フツ

フツ

はあ

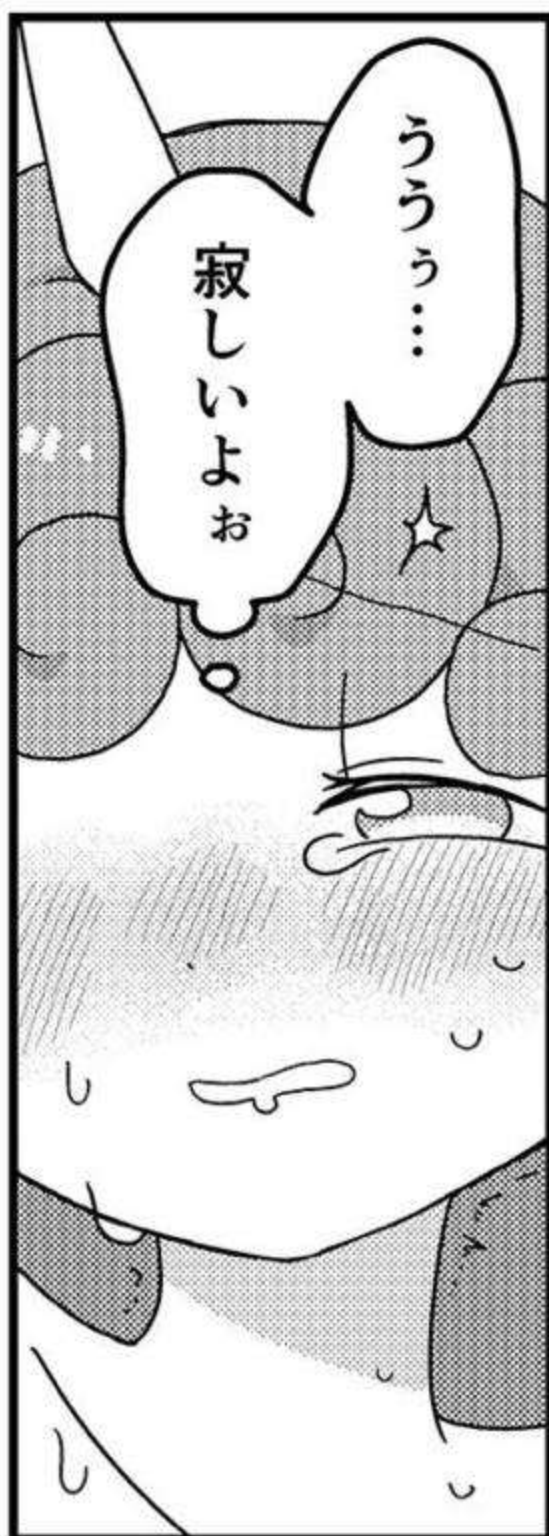
あ



ん…

ゾゾゾゾゾ





← To Be Continued

おわり

まっ
アタ
子は
……

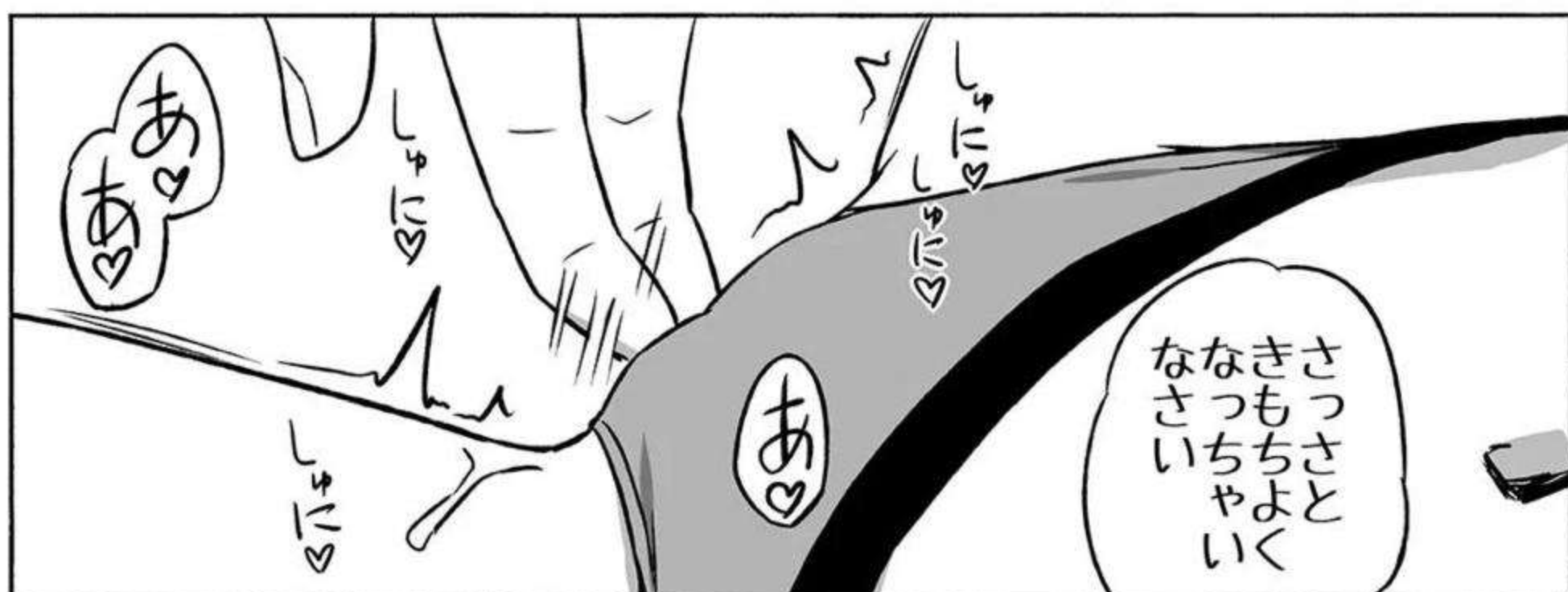
い
切
な
だ
か
ら
ら
っ
て
季
節

好
き
勝
手
さ
れ
の
ち
や
困
る
の
よ

少
し
は
我
の
慢
っ
て
し
も
の
が
出
来
な
い
の
か
し
ら
な
い
?

人
の
布
団
で
盛
る
ん
じ
や
な
い
わ
よ
!

ご
め
い
ん
な
……



ほらほら
我慢なんて
いなくて
いいから

ふん

あ♡

あ♡

あ♡

さっさと
イっちゃい
なさい

くちゅ
くちゅ
くちゅ

くちゅ
くちゅ
くちゅ

くちゅ
くちゅ
くちゅ

霊夢ちゃん♡

わたし♡
もう♡
♡



少しは満足した？



.....

ふーん...

にー...

今夜は永く
なりそうね
.....

クルッと
とろける
あうん
お紙
かきと



博麗神社...!

博麗神社...!

あ



境内で全裸
変態ポルス

すっぴん♡♡♡



今誰か
来たら…

変態露出
オナニーしてるの
バレちゃう♡♡♡

ガニ股露出で
おまんこ悦ぶ
発情メス犬なの
バレちゃう♡♡♡







霊夢さん
だいじょうぶ
れすかあ？

ゆたっ♡



69







うーん…
手じゃやりにくい
なあ…

そうだ！

んやうて…

おっぱいを
使えば広い
面積を…♡

ア…!?

ハッ♡

ふふ
なんだか
かわいいです♡

あ…

ギョム♡

ふにゃ♡

おっぱい♡







おはらいぼお
きれいになり
ましたねえ...
ムニャムニャ...

結局...

ずるん...

流れであうんと
何回もしちゃった...
あうん、大丈夫...?

寝てご...!





こ...この子...
こんな偶然
あるかしら？
もしかして
寝ぼけてる
フリをして
誘ってるん
じゃないの？
襲って欲しい
んじゃないわ
の？これい
ゆる据え膳？

いや...駄目よ
博麗霊夢！
ここは毅然と
した態度で
理性的にやり
こなすのよ！
じゃないと
あうんちゃん
に嫌われちゃ
うじゃない！
落ち着け...！
落ち着け...！





朝からハレンチ娘に
お説教する必要がある
とは!?



悪い子め!



れ...
霊夢さん
どうしたんですか?
急に...!

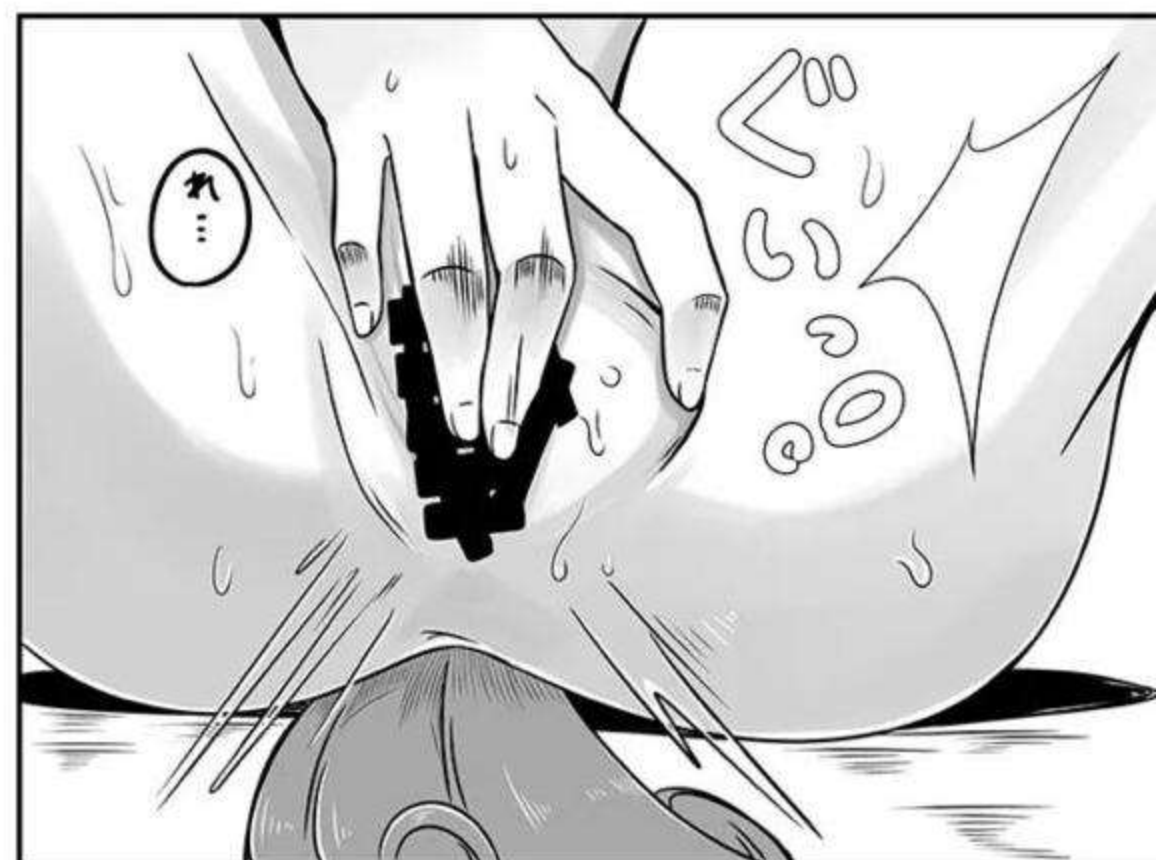


やっぱり誘って
るんじゃないの!



えー!?

えっ?







霊夢さんが変に!!
まやみ...
異変ですね!!

わああああああああ
スゲヤなあうんちん
なんぞ思いうたの
おはようやみん



どうしたんです？
そんな怖い顔して――

霊夢さん
掃除おわり
ました！



限界霊夢さんと
あうんちゃん

作。エヤブス



ごめんね
あうん

我慢できなく
なっちゃった

れ
霊夢ちゃん……？



ぐわん

はあ〜…

疲れちゃいました〜…

あっ♡

霊夢さん♡



霊夢さん！
お仕事いっぱい
がんばったので
褒めてください♡

むにゅ♡



■あうんちゃんが悪いの…っ！■

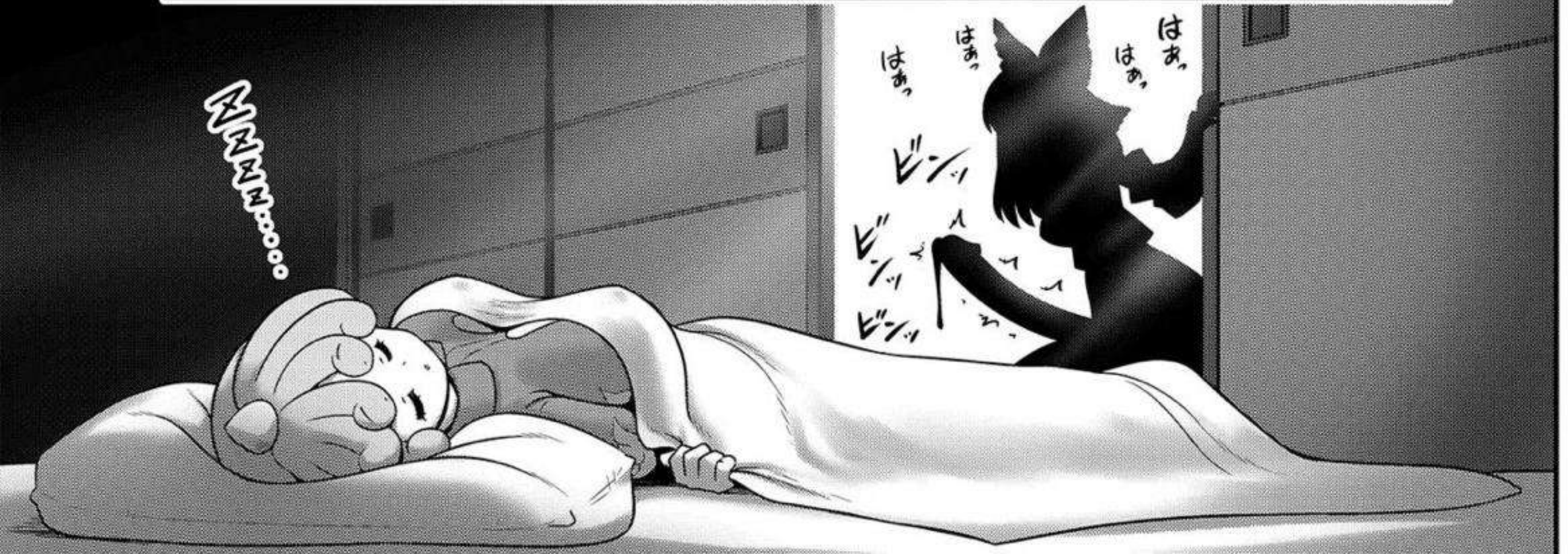
描いた人 ともきとものり

あ…
ありがとう
あうんちゃん…
スゴイ…っ

最高に嬉しいわ…っ！



そ…
そうね…っ
私もすごく
元気に
なっちゃう
わ…っ!!!



絶対睡眠の札

あうんちゃんが
悪いのよ…っ！

こんなエロい
おっぱいして…っ！

私をずっと
ムラムラ
させまくっ
て…っ！

くちゅ…

こんなの
もう…っ

こんなの
…っ

86

犯すしか
ないじゃ
ないっ!!!





ごめん
ウソ…っ

純粹無垢な
あうんちゃん
は悪くないの…っ

私が
ダメなの…っ

こんな
こと
しちゃ
ダメ…っ

ダメ…

ダメなのに…っ

でる…っ

射精るうっ!!!



あああ
あああ
あああ

ビュルル
ビュルル
ビュルル

ポポ

ポポ

ポポポ

ビュルル

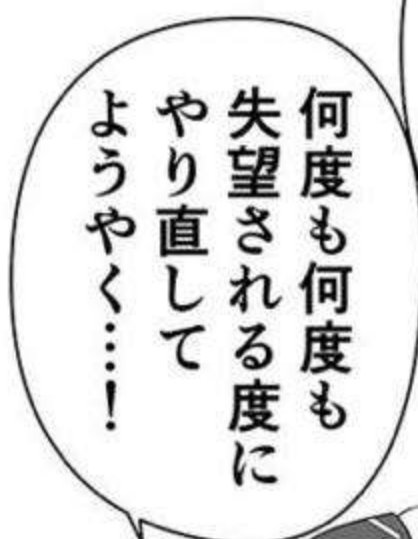
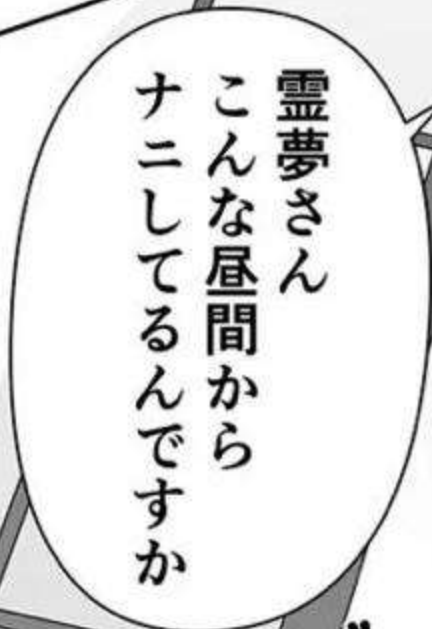
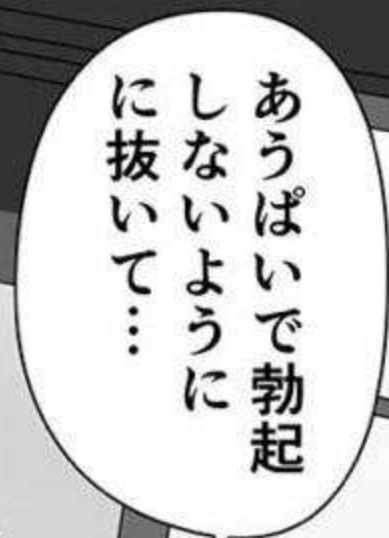


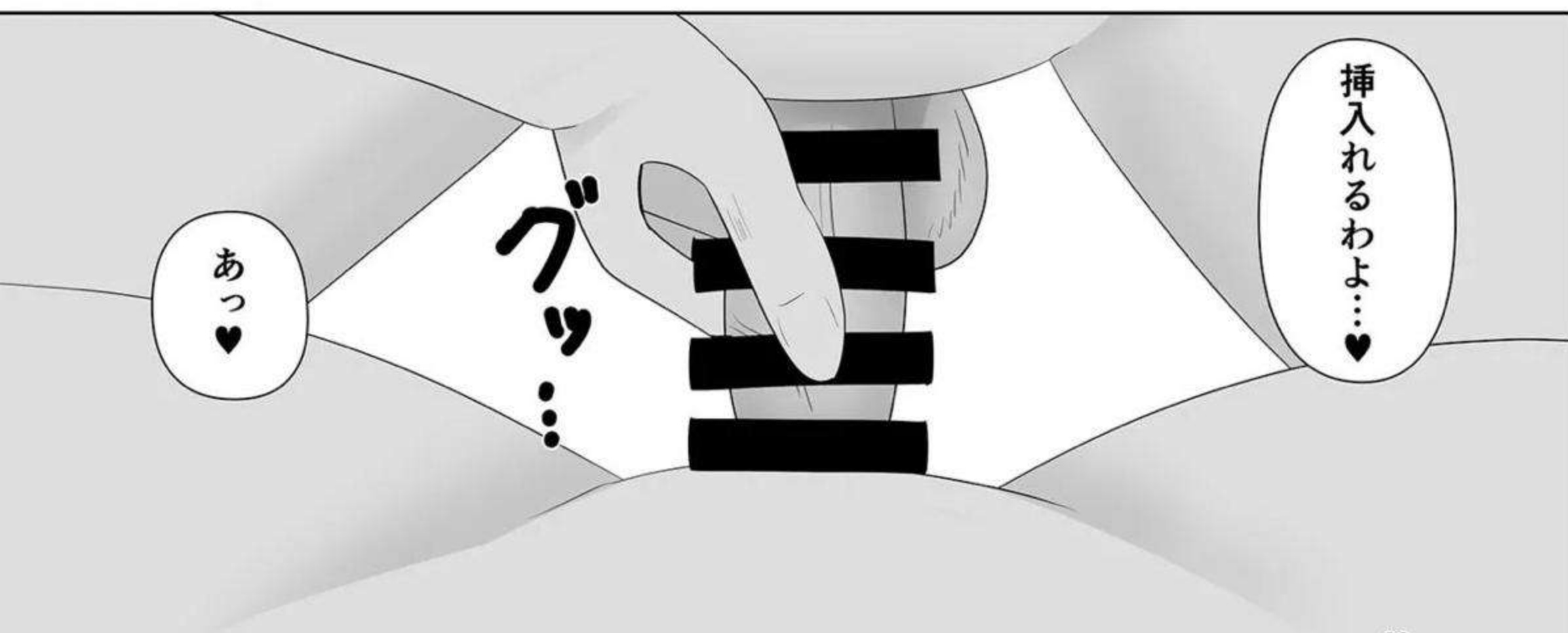


『00/99+』
著:宵闇鳥



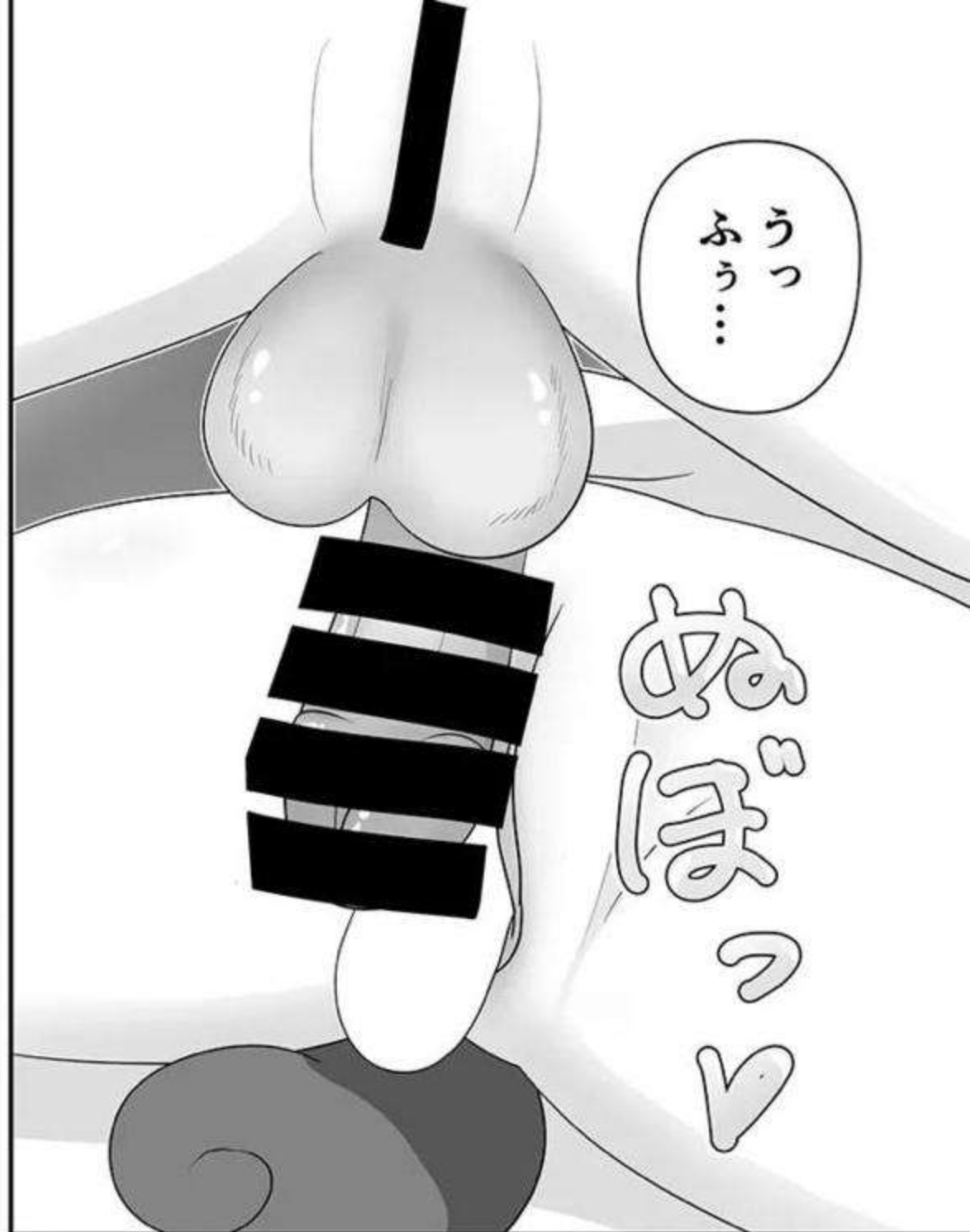
失敗の数々...













反応無いから
変だと思ったら

相棒
何やってるの!?

あー
落ち着いて…

霊夢さん1人占め
しないでって
約束でしょ!?

えっ
なんであうんが
2人…?

ってことは
ルート分岐
2倍ってこと…?

霊夢さんもですよ!
なんで私じゃなく相棒と
えっちしてるんですか!
フケツです!

もういいです!
霊夢さんには
失望しました!!

ちっ違うの!
霊夢さんが
えっちしたそうに
してたからつい…

あっ

あっああ…

BAD END



ようこそ
博麗神社へ♡

ん？
お客さんかな？

あっ！
しりしりさん

あうん♡

こんばんわ

れーむ居る？

ぽろん♡

おおっ♡♡
こんなちゃんぽら下げる
妖怪は会わせるわけには…

ぽろん♡

はくれい神社は
おちんぽいばい
かいた人：奈津みかん

わ！わ！
えっ！ちよ！
何よこいつ！



腰、下がらないように
金玉引っ張り上げて
くださいね♡

え…
あ…はい…
…

もうちょっと上…

おはようございます♡
おはようございます♡
おはようございます♡

あ…でも…♡

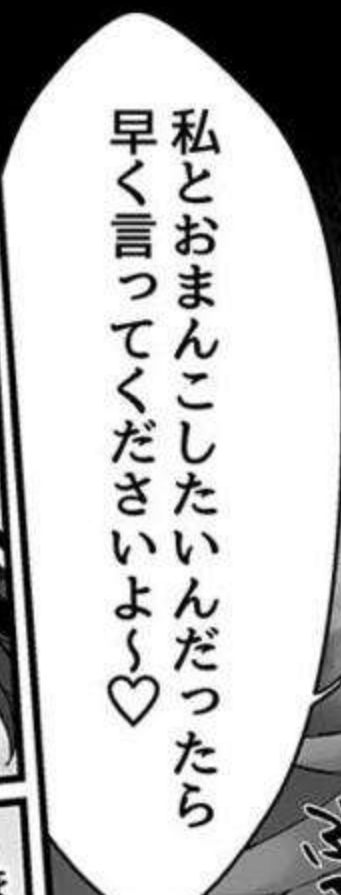
何してるんですか？
そこのお嬢さんも
『首輪♡』
つけてくださいね？

え…？
これ自分でつけるの？
金玉に…♡

おト品…♡
♡♡♡

この後メチャクチャ(略)









侵入者も参拝者も
ゼロ人です！

今日も
ありがとうね
そ、そう



うちの狢犬が
スケベすぎる

はえ~~~~~
すっごいおっきい

どたふん



最近

あ！

おかえりなさい
霊夢さん！



博霊レイブ
迫真霊夢！
野獣と化した参拝ゼロ人
ひつつ

あっ

あうん——!?



曇ってききましたね
そろそろ中
入りましょうよ

あっ
そうね







108





イキスギイ

イクウイクウイク♡♡



それじゃあ
今日も……

搾り取っちゃ
いますね♡

ふたりは幸せな
ボテ腹セックスをして
終了



数力月後

あうん……
ボテ腹が
セクシー……
エロいっ！

霊夢さんこそ♡

[illegible]









あうんちゃんもは霊夢ちゃんが好き！
みんなじってるね？

かいたん：めたぐろ



れいむさんッ





115





あつ 温か…
霊夢さんすき…

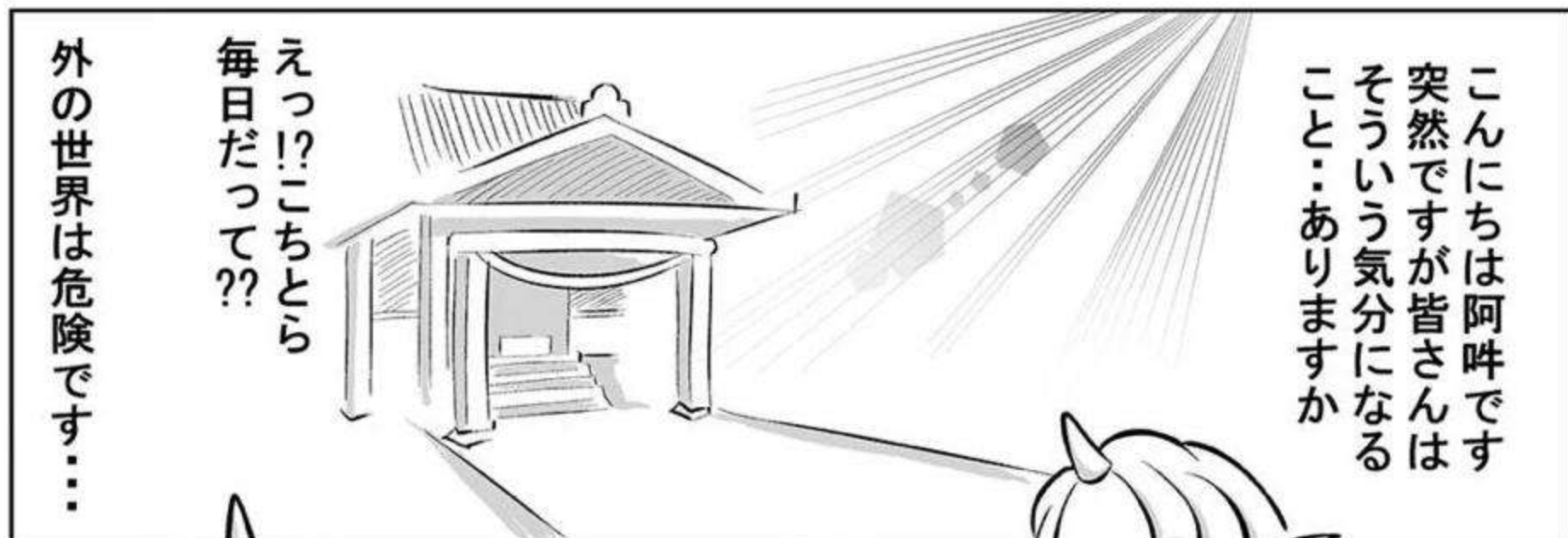
はいはい
わたしも
あうんが好きよ

ずっといついっしょに
いたいです…

霊夢さんそろそろ
出ますッ
膣内、なかでいいですか

いいわよ
好きなだけ
好きなとこに
出していいからね







っとその前に
消されますね……
さようなら阿咩です



さようなら
阿咩です。
まさか主にぶっかける
日が来るとは……
そして家族にシてるところを
見られる、これが男の登竜門
(メスだけど)

恥ずかしすぎる
もう消えてしまいたい!

あうん









れっ...いむさん!!
ちゅと休想...
グナよ
まだ残ってるでは

イッ...?
グッ♡
ほら
まだ出るじゃない

クチュ
ジュポ♡
ジュポ♡
クチュ
ジュポ♡
ジュポ♡



霊夢さん！
お風呂出ました！！

次入ってくださーい！！

この狛犬、
スケベ過ぎる。

ホカ

ホカ

プリン

お風呂上りの艶

THおんと

うおおー...！
すげーしょー...！
過ぎたー！

ドビヤッ

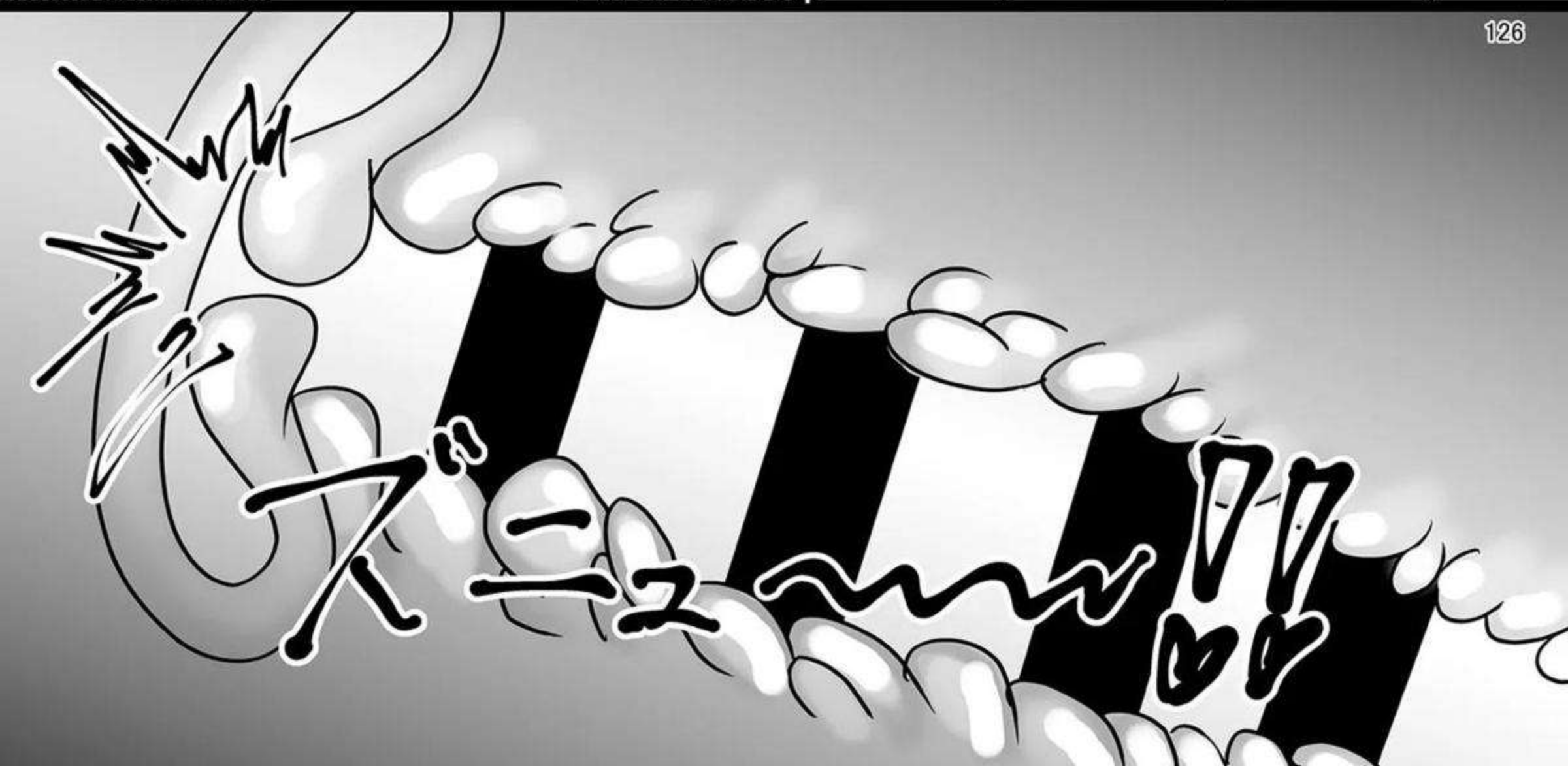
色々ぶらんぶらん
させて誘ってない
わけないよね?!

さつきまで
萎えちんだっただのが
バキバキじゃない♡

い...いや
そんなことは...///

んじゃ
わからすね

お♡





お風呂
入り直した

ベトベト
になったね

ちちち

「……ヒマだなあ。」

ある陽気な日の昼下がり。あうんはひとり居間でゴロゴロと時間を潰していた。二人で一対のあうんは、片方が神社の外を警備している間、もう片方は自由に過ごしている。ちゃぶ台の上にお茶を並べ、その横で転がっているあうんだが、「あうん」はきちんと今も警戒態勢なのだ。

「もう片方の私はちゃんと仕事してるかなつと……あー、ちゃんと入口にいるや。お日様が当たって気持ちいいんだあ。」

もちろん自分同士なので、相手が今何をしているのかも手に取るようにわかる。感覚を共有しているわけではないが、感じているものを主観として理解できるのだ。

「……やば。」

そして、そんなぼかぼかの陽気の中。神獣の神の部分を表に出した外のあうんはともかく、獣の部分丸出しのこちらのあうんには、この春の気は熱いものと呼び起こすものだった。つまり、発情期である。

両足がこすり合さり、手は股座に伸びる。ごくごく自然な反応として息は上がり、上気した頬は艶めかしさを纏っていた。

神獣だろうと獣は獣。春の気に当てられれば当然抑えられない劣情を抱くことになる。

「……私にもバレてるよねえ。このままじゃ向こうの私まで発情しちゃうし、ってか、耐えられないし。いいよね……？」

あうんはよたよたと立ち上がり、障子を閉じて奥の部屋へと引きこもる。薄い引き戸と障子だが、外から二重の壁があるとこの安心感は女の子の秘め事に必要不可欠だ。

「ごめんね私、すぐ済ませるから。ちよつと待ってて、ね。」

ショートパンツを脱ぐと、パステルグリーンのショーツが薄暗い部屋に現れる。そのクロッチからは一筋の透明な渡し橋が伸び、僅かな光を受けて煌めく。

「あー、さっき無意識に触っちゃってたから……服汚れちゃってないかな？ んー……外からは見えないから大丈夫、かな。」

秘所の疼きは増すばかりだが、乙女のプライドはそれよりももう少しだけ強く、ショートパンツの確認を優先する。内側を見れば濃い一滴の跡が残っているが、外から見られても気付かれることはないだろう。

「……いや、これじゃニオイで気付かれちゃうね、はは……。」

しかしそのショーツには、誤魔化すことのできない滴りが広がっていた。外から見てもわかるほど水気を蓄えたそこは、獣であれば絶対にたちまちわかるほどの雌の臭いを放っている。

「うー、もうお尻のほうまで濡れちゃってるよう……」

わざと口に出して自分の痴態を実況する。誰かに聞かれたらどうしよう、という不安と焦りが鈍い興奮を誘い、熱い露を一層熱くする。雌器に感じるぬるい湧出感に、あうんの興奮はさらに高まっていく。

「まだイジってもいないのにこんなに濡れちゃった……うあー、これ私にバレてるんだもん。ってか私も同じことされそうだなあ。門にいるときにこんなことされたら、ガマンできないかも……そしたら、妖精とかに見られて……こんな状態じゃろくに抵抗もできなくて、えっちないたずらされちゃって……」

妄想を口にしながら、ゆっくりとショーツの濃い部分をさす。くちゅくちゅと粘り気のある水音があうんの耳まで届くと、ぬらつとした感触が指先にまとわりついてくる。

「あう、音ひびいてる……ニオイもすごいなあ、自分の臭いで発情するの、流石に恥ずかしい……でも、自分のだけど、そんな嫌いじゃないっていうか。」

自分の蜜をたっぷり吸った指を、鼻先に近づけ、すんと嗅ぐ。「じ、自分が発情してるってわからされてるっていうか……なんでこんなヘンタイみたいなことしてるんだろ。」

しかしその言葉とは裏腹にあうんの心の中には生ぬるい快樂が生まれていた。秘裂を逆の指で強くこすっているというの

あるが、それよりも自分の発情を突き付けられているようなその感覚があうんを熱い情動に突き動かしていく。下腹部からジンジンとした疼きがこみ上げ、それは徐々に耐えられないものへと成長していく。

「あつ、んうっ、はあつ、ごめんなさい、ヘンタイでごめんなさい、自分のニオイで発情して、おまたぐちゃぐちゃにして、部屋中ニオイまみれにしてえっ、ごめんなさいい！」

誰にでもない詫びの言葉が口から漏れる。責められているというただの妄想だ。だが、それはあうんの快感を押し上げる十分な材料になる。

「あつ、来る、くるう！」

足が勝手に伸びるのを抑えつつ、四つん這いの姿勢を取って脚を広げる。雌の犬が雄を受け入れる時の体勢だ。脚と脚の間から広がる疼きが、自然とこの格好を取らせる。

「しょうがないじゃん！ 発情してるんだもん！ 発情期のメスだもん！ あつ、んんっ！」

釈明ではない、もっと下賤なカミングアウトを叫びながら割れ目の上の蕾を押しつぶす。先ほどまでよりも鋭い快樂が頭まで一気に駆け抜けけると、脳内を甘い幸福感で塗りつぶした後で、口から勝手に甘い声となって放たれる。

「やあつ、だ、ダメ、来ちゃう、きちゃ、あ、あつ、ああつ、」

徐々にうわずっていく嬌声。だが、あと最後の一步というところ、薄くなった理性が働く。

——これ本当に外に聞こえちゃうやつじゃない?!

昇り詰める瞬間、意地でぎゅっと口をつぐむ。だが、押しつぶされたクリトリスから溢れ出す快楽の濁流は少女の意志を軽々と押し流す。女の子には絶対に耐えられない快楽が来る。

あうんは乙女としての自分の敗北を察する。とっさに目の前にあったショーツパンツを丸め、そこに口を突っ込み、そして。

「んんん、う、んうううう!!」

腰を高くつき上げ、クロッチの染みを見せつけるように股を開き、ガクガクと大きく震えて、受け入れられないほどの快楽の波を受け入れる。普段の自慰よりも遥かに強い発情期の絶頂は、誰にも聞かれてはいけない、しかしそれにはあまりにも大きすぎる叫び声となって部屋中に広がった。

「んんっ、んぐ、はあっ! はあ、はあ、はあ……」

ショーツパンツから口を離し、浅い呼吸を繰り返す。あまりに強い波の余韻は、あうんに深呼吸ひとつさせてはくれない。

「……えらい恥ずかしいことしちゃってたけど、まあ、流石にいったん収まった……かな、まだおなかの奥じわじわしてるけど、たぶん我慢できるよね。」

あうんは息をゆっくり整えて、ショーツを脱ぐ。どろりと流れ

出す液の量は尋常ではなく、ショーツの中を埋め尽くす水の塊となっていた。

「あわわ、畳が汚れちゃう。」

あうんは手近にあったちやぶ台のふきんで零れた愛液を拭い、ショーツと一緒に手に持って風呂場に入り、体を清める。

「……流石に謝りに行かなきゃかなあ。えっと、私は今何をしてるかなっと……ん、んんん?」

しばらく意識を向けていなかった相方の様子を探ると、体中に絡まったツタにがんじがらめにされて、荒々しい息遣いで妖精に全身を愛撫されているところのようだ。

「……ごめんなさい! 今助けに行くからー!!」

慌てて服を着て相方の下へと駆け付けると、妖精は慌てた様子で逃げ出していった。

「えっと……なんでこんなことになってるの?」

「誰のせいだと思ってるの……!」

涙目で下半身裸になったもうひとりのあうんの身体からツタを引きはがすと、あうんは自分に腕をぎゅっと掴まれ、神社へと連れられて行く。その表情は艶めかしく、いやでも先ほどの自分の痴態を思い出させるものだ。そうしてそのままあうんは自分に神社へと連れ込まれていくのだった。

ささき

「……ヒマだなあ。」

ある陽気な日の昼下がり。あうんはひとり神社の入り口に
ある石の台の上で座っていた。元々石像だったあうんにとって、こ
の場所は最も落ち着く場所なのだ。

「しかしやっと暖かくなってきたねー。こう暖かいと……眠く
なるよねえ。」

誰にともなくつぶやく。あうんが口を利けるようになったの
はつい最近のことであり、声を出すこと自体があうんにとって
は娯楽のひとつになっている。

「あと、妖精たちが活発だねー。こりや私がいなかったら今頃
神社はひとたまりもなかったよ。霊夢さんは私に感謝しなきゃ
だね。」

霊夢は今日一日法事で神社を留守にしている。あうんが石
像だった頃は賽銭箱にいたずらされたり庭にいたずらされた
りと大忙しだったのだが、あうんがいることでその被害は実際
にかなり減っている。

「つまり私たちにとっては商売あがったりってこと！」

「うわあ妖精だ。あなたたち前も来たよね、また来たの？」

あうんは面倒くさそうに目の前を見る。以前も退治した妖
精たちだ。妖精にしては珍しく、三人組で行動している。

「また倒されたいの？ ま、暇だったからちようどいいけど。」

「残念だけど今回はそうはいかないわ、これぞ私たちの秘密兵
器！ じゃーん！」

赤い服の妖精がふところから丸い何かを取り出す。

「……ツチノコ？ わあ、春の気がすごい。」

「ふふふ、甘く見てもらっちゃ困るわ。さあツチノコよ！ その
力をこの神社の犬に見せてあげなさい！」

赤い妖精がツチノコを掲げる。が、ツチノコはうんともすんと
も言わない。妖精たちはあれー、とツチノコを叩いたり引っ張つ
たりするが、不機嫌そうな顔つきをするだけでやはり何も言
わない。

「……あ、ヤバい。ちよつとあなた、こっち来て。」

青い妖精に引っ張られ、あうんは謎の位置調整をされる。そ
の時だ。ツチノコの堪忍袋の緒が切れる。名状しがたい声で泣
き叫ぶと、周囲にツタが現れ、三人の身体をからめとっていく。
「いやー！ なんで私たちまで！」

「まあ、サニーが叩いたから怒ったんでしょ。」

からめとられる妖精たちはのんきそうだが、巻き込まれたあ
うんはただ事ではない。

「やば、油断したわ……でもこんな時のために私は二人いる！
さあもうひとりの私よ！ 今すぐ助けて……ってちよつと！」
あうんがおそらく居間でゴロゴロしているであろうもうひとりの自分の様子を確認すると、どうやら自慰にふけっているらしい。迂闊に感覚を飛ばしてしまったせいで、生々しい愛液の臭いまで感じ取ってしまう。

「な、なんでこんな時にそんな……ん、何か聴こえる？」
感覚を受け取ったあうんの耳に、もうひとりの自分の声が聞こえてくる。

（うー、もうお尻のほうまで濡れちゃってるよう……）

「なんでそんなとんでもない発情してるの!? いや、この際それはいいから助けて！」

「……ん？ あれ、もうひとり神社にいる……ハッ、まさかそいつに助けを求めて！」

青い妖精が何かに気付いたように、あうんの口を閉じる。その時、偶然股のところに手が触れる。

「……え、なんで？ この状況で興奮してるのアナタ……？」

「いやもうひとりの私が大絶賛オナニー中で！ 感覚を繋げちゃったから私まで発情しちゃっただけで別に縛られて興奮してるわけじゃないから！」

「ふーん、よくわからないけど、そういうの好きなんだあ。」

いくら違うといっても、ショートパンツの上からでもわかるほど濡れているのを知られてしまったのは事実。泣きたいほどの恥ずかしさであうんは顔を真っ赤にってしまう。

「ふふふ、ちよつと楽しくなってきた。前回やられた仕返し、こういう感じでも楽しいかもね？」

「ちよつとスター、私たちを先に助け……ぎゃー！」

赤と黄の妖精がどこかへと連れ去られていく。これからツチノコにひどい目に合わされるのだろう。それはもういい。あうんにとっては目の前の青い妖精だ。

「うう、なににする気なのよお。」

「なにしてそりゃあ、ねえ？」

不安と、同時に感じた不思議な期待と一緒に、リンクしている相方の声が聞こえてくる。

（まだイジつてもいないのにこんなに濡れちゃった……うあー、これ私にバレてるんだもんない。ってか私も同じことされそうだなあ。門にいるときにこんなことされたら、ガマンできないかも……そしたら、妖精とかに見られて……こんな状態じゃろくに抵抗もできなくて、えっちないたずらされちゃって……）
「ちよ、変なこと言わないで……そりゃ私、色々口に出しながらオナニーするタイプだけど、今は本当にやばいから……」

実際に抵抗もできず、妖精の目の前に放り出されて恥ずかし

「目にあわされそうになっている身としてはこれほど恐ろしいこともない。だが、もうひとりの自分は助けしてくれる気配はなく、こちらのピンチにも気付かずに自分を慰めている。」

「んー、あなたのこと未だによくわからないのよね……でもまあ、女の子なら弱いところは妖精と一緒にでしょ？」

そう言うとき青い妖精は、器用に拘束を解かないようショーツを下げってくる。中から出てきた薄緑のショーツは股の部分がびっしり濡れて、濃い緑色に変わっていた。

「やつ、やだ、見ないでよお……」

「いやー、こんな強い臭いで誘われたら女の子でも釘付けになっちゃうわあ。あなた石像だと思ってたけど、こんなに臭いがするってことはちゃんと生き物なのね、それも獣っぽい。」

厄介な相手に捕まったと思う。こちらの羞恥心をうまく刺激してくる言い回しだ。臭いとか獣っぽいとか、暗に獣の発情期の強烈なおいがすると突き付けてられているようだ。

「ふふ、おつゆ垂れてきちゃったわね。恥ずかしいこと言われるの、好きなんだあ。」

「や、やだあ……」

妖精ごときに好き放題されている情けなさと、自分でも感じ取れるほどに広がる自分の発情した臭い。どちらもあうんの恥ずかしさを高め、気持ちを高ぶらせてくる。

「どれどれ、ふとももをつつーと。」

「んひゃあっ！」

恥ずかしさで敏感になったあうんには、太ももを撫でられるだけでも十分すぎるほどの快感だ。足の指が勝手にぎゅっと締められ、腰がグツと突き出される。

「うわー、こんな姿見られちゃうなんて……女の子として同情するわ、私だったらちよつと耐えられないかも。」

「じゃ、じゃあやめてよお……ほんとダメだから……」

「んー。どうしてほしいのか、こっちのお口にも聞いてみよっかなー。えいっ。」

愛液でびっちり張り付いたショーツは何の護りにもならず、妖精に敏感なクリトリスをツンと狙い撃ちされてしまう。勝手に腰が跳ねて、恥ずかしい声をあげてしまう。

「あはは、おもしろーい。でもー、なんて言ってるかわからないからこれも脱がしちやあつか。」

「やだ、ホントに恥ずかしいからあ……」

「いいじゃない、あなたそういうの好きでしょ……つとー！」

びしょびしょのショーツが脱がされて、あうんの割れ目が空気にさらされる。まだ冷たい風が当たり、自分の恥ずかしい場所が見られていることを伝えてくる。

「あー、パクパクしてるー。やっぱりもつとされたいんだー。」

「違う、違うの、お願いだから見ないで、恥ずかしいの……！」

「無理ねえ、こんなツヤツヤでヌルヌルで、ほら、また奥からお
つゆが溢れてきた。おめさんもピンとしちゃって。いやーそれ
にしても綺麗なピンク色。」

「実況、するなあ……！」

「ねね、指入れてもいい？」

「だ、ダメ！」

「そっちのお口には聞いてないの。ほら、こっちは？」

妖精の指がやさしくクリトリスを撫でてくる。ピリツとした
快感があうんの口から甘い声をあげさせる。

「ん、答えはえっちなおつゆ。トロトロしてるってことは、オツケ
ーってことでいいのよね。じゃあー、えいっ。」

妖精の細い指があうんの恥ずかしいところにつぶつぶと入っ
ていく。中のひだを撫でられると、腰が勝手に浮いてしまう。

「でもってー、この辺のざらざらが女の子の弱点ーっと。」

膣内の前の方をきゅつと押され、気持ちよさと我慢できなさ
が同時に襲ってくる。普段なら耐えられる快感だが、不意打ち
で襲われれば我慢することもできない。

「んうっ!! え、あ、うそ、やだ! やだあ……！」

「あ、黄色い。えっ、今のだけでおもらししちゃったの? 恥ずか
しー。それじゃ本番絶対耐えられないじゃん、アハハ!」

「も、ほんと、やだ……やめてよ……！」

徐々に弱まる音の勢いと逆に、あうんの目に涙が溜まっていく。
おもらしまで見せてしまうのは、完全にあうんのキャパシティ
を超えていた。

「あーかわいいー。次はどうやっていじめてあげようかなあ。」

「うわー!! ごめんなさいごめんなさい遅くなりましたあ!

私に何してるんですかこの妖精はあ!」

「えっ!? あっやば探知忘れてたー!」

青い妖精が慌てて逃げ出していく。その背後、遠くからもう
ひとりのあうんがこれまた慌てて走ってくる。

「えっと……なんでこんなことになってるの?」

「誰のせいだと思ってるの……!」

もうひとりのあうんにツタをはがしてもらいながら、ふと思
う。あれだけ恥ずかしい姿を見せたのに、身体の疼きは一向に
静まる気配がない。あうんはもうひとりの自分の腕をつかんで、
神社へと歩いていく。

「私のせいでこんなことになったんだから、ちょっと付き合っ
てもらうからね。そう、これはオナニーだから。私だけでやるん
だもん。ただのオナニー。」

誰に言い訳するでもないが、そう言って神社の奥の部屋へ向
かう。

「ね、ねえ私今着替えたばかりでさ？」

「知ってる。自分だけ気持ちよくなってたんでしょ？ 私があの妖精に好き勝手されて、結局気持ちよくなれなかった間に。」

「えっと……うわー、そうだね。んーこれ私のせいだなー、わかった。すぐ気持ちよくしてあげる。」

「ん、よろしく……っ！」

割れ目の中に指が入ってくる。クリトリスが親指でぐりぐりといじられる。と同時に、頭をグイッと引き寄せられて、口の中を舌で犯される。

——全部同時には聞いてない！

——だって急いだほうがいいでしょ？

——そうだけど、こんなの本当にすぐ……！

脳内で考えることが互いに伝わり、キスをやめないまま会話する。舌とクリトリスと膣内で快感がどんどん増幅されていく。

——あつ、ヤバイ、本当にこんな簡単にイッちゃうっ！

——いいよ、今まで我慢した分、いっぱい気持ちよくなって。

体に電流が走ったように、身体が大きく跳ねる。堪えきれない快感が押し寄せてきて、一気に絶頂まで持っていられる。

「ぶはっ、いやー、散々焦らされていたとはいえ、ここまで簡単にイッちゃうとは……我ながら思うところがあるなあ。」

「自分にまで言葉責めされたくないんだけどっ、はあ、はあ……」

「ごめんごめん。お詫びに今日の門番変わるから、しばらくゆつくりしてて。」

「ん、お願い……私片付けておくから。」

もうひとりのあうんを送り出し、あうんはたつぷり時間を使って余韻に浸ってから起き上がる。

「……あの恥ずかしいの、結構よかったなあ。」

次にあつたときはちよつとイロイロお願いしてみようか、と一瞬思っ、いやいやと思ひ直す。今回でもギリギリだったのだ。次は本当にプライドをズタズタにされかねない。

（プライドはもうボロボロだけどねー）

「うるさいなあ！」

障子をあげ放ちながら、もうひとりの自分の声をかき消す。

外は夕日がゆつくりと沈んでいくところだ。もうじき暗くなる。

「霊夢さんの帰りは夜遅くだっけ。換気は間に合うかな。」

むわっとした空気が春の爽やかな風に吹かれ、どこかへと消えていく。

「……もう妖精になんて負けないんだから。」

油断大敵、次はない。たぶん。そう思いながら、あうんは夕食の準備に向かう。でも結構よかったなあ、またやってほしいなあとか思いながら。

たゆぽよあうんちゃんのダブルパイズリ

寺座 わたがし

「霊夢さん、どうですかあ？　こうしてもらうの好きなハズですもんね♡」

「や、め……っつ　あうん、そんなこと言わないで……や、ああああっ！」

障子越しに朝日の光が差し、早起きな雀の声のどかに聞こえてくる部屋の中。私は布団に潜り込んできた無邪気な狛犬少女に、下半身へのしかかれる形になっていた。

だけどそれは子どもや仔犬がじゃれついてきているのとはわけが違って……

もにゅ♡のすんっ♡ぷに、たぶんっ……♡♡

むに、ふにゅ、たぱたぱたぱ……っ♡♡

私の身体は寝ている間に変異を起こしてしまっていて、本来ならあるハズのないオスの器官を生やしてしまい、それをあうんによってさらけ出されて彼女の豊かな乳肉で包み込まれていたのだった。

「ちよっ、待っ……　お願いだから、ちよっと待って！　こんなに強く挟んでこね回してくるなんて、激しすぎ……

や、あああああっ!!」

「あはっ♡　つまりは気持ちいいってことですよね♡♡　こうやってぎゅーって左右から押し付けてもらうのが好きなんですよね♡♡」

もっちりとしていて、すべすべとしていて、ぎゅっと中身が詰まっているような温かい弾力。それこそ特上品で特大サイズの大福ふたつにぎゅっと挟まれ、もにゅんもにゅんとしごきたてられていくオス肉。どんなことをすれば、どんな刺激を与えれば私が感じてしまうかを完全に把握している狛犬少女は、容赦なくペニスを乳肉でこね潰してくる。小玉スイカくらいはあろうかという肉風船を両手で挟み寄せ、上目づかいで私を見つめ、身体全体を使うようにして上下に動いてくる。

「えへへっ、朝勃ちおちんちん、おっぱいの中ですますます熱くなってきたちゃいました♡　ビクビク震えて、トロトロおつゆ垂らして、とっても嬉しそうですよお♡♡」

私を挟みこねるのに邪魔だと思ったんだろうか。掛け布団を払いのけたあうんはクスリと笑みをこぼし、小休止を与えるかのように身を起こしてペニスを解放していく。隠すものもさえぎるものもなく完全にあらわにされた

張り詰め肉は、自分がこぼしたヌルつきですっかりドロドロになってしまっている。

「なのに霊夢さんってば、やめてとか待ってとかばかり♡遠慮なんてすることないのに、どうして素直に喜んでくれないんですかぁ♡♡」

「そ、そんなこと言われたって……っ！」

こんな関係が、行為が、もうすっかり定着してしまっていた。妖怪やそれに準じた者たちと関わりすぎたせいで、私はちょっとした劣情を抱くだけで身体に変異が起きることになり、それがキツカケとなってこうして彼女に肉竿もてあそばれるようになっていたのだ。

そしてその頻度は回を重ねることに多くなってしまっていて…… 私はほぼ毎朝、本当の男性のようにペニスを勃たせるようになり、それをいじられて白濁を搾られることが日常になっていた。

しかもそれは最低限の回数でしかなくて、多ければ日に三度四度となることもあった。ふとしたことでムラついたり、仕事として妖怪退治に出る前後のときだったり…… 私の身体はサカリのついた獣のようにオス肉を生やし、それを張り詰めさせ、狛犬少女に処理されることを繰り返す

ようになっていたのだった。

「ふふっ 解ってますよお、霊夢さん♡ 博麗の巫女たるもの、快感に溺れちゃうわけにもいきませんもんねー♡♡ おちんちん生やせて、それをおっぱいで可愛がってもらって、アンアン喘いじゃうなんてこと、恥ずかしくてできませんもんね♡♡」

「……っっっっ!!」

もうわかってる。その言葉は私の気持ちを汲んでくれているのであるけれど、本当のところはこちらを煽ってきてるだけではないってことを。完全に悪意だけというわけじゃないけれど、この狛犬少女は私が恥じらう様や喘ぎ悶える姿を楽しんでいるわけなのだ。

「でもお、あうんの前だけでなら余計なこと考えなくていいんですよ♡ 今はあうんと霊夢さんのふたりきりなんですから、ただの女の子になって喘いじゃっていいんですから♡♡」

「ひ、あ……ん、くううっ…… そ、そんなに、しごかれちゃったらあああっっ!!」

くにゅ♡ にゅいっ♡

ちゅくちゅくちゅくちゅくううう……♡♡

何もかもお見通しだと言わんばかりな表情で私の目の前に近付いてきて、その手が怒張を握り込んでくる。甘く危険な囁きを吹きかけられながらリズムよくペニスをしごかれて、理性がみるみる内にとろけさせられてしまう。沸き立つ腰奥。浮き上がる下半身。ドロドロとした粘りの強いものがせりあがってきていて、張り詰め肉は早くも限界を感じて小刻みに震えだしてしまっている。

「カラダのほうは、その気になっちゃってるみたいですね♡」

もう遠くない内に白濁が噴き出してしまう…… そんな射精の予兆を敏感に察しとったのだろう。すっかり気をよくしたらしい淫らな狎犬が、何かとおきを残しているような顔で私を手放していった。

「う、あ…… わ、私っ」

これは焦らすための寸止めじゃないことはわかっていたけれど、それでももどかしさに身をくねらせずにはいられなかった。始めの頃はペニスをいじられることや白濁を射精^だしてしまうことに強い羞恥とためらいを覚えていたハズなのだけ…… こんなことを毎日のように何度も何度も繰り返してきたせいで、私は精を噴き出させる快感にすっかり溺れてしまっていた。そしていつしか自分のほう

から、射精^ださせてほしいとおねだりしてしまうようになっていた。

「えへへ、霊夢さんってば切なそうな顔しちゃってます♡ いつもはどこかそっけない雰囲気で、お仕事のときは凛々しくて勇ましい霊夢さんが、私だけに見せてくれるふにやふにやな顔……♡♡」

こうして精液を搾るのは、私が妖怪から淫らなことをされても心を染められないようにするため…… そんなことを彼女はいつか言っていたけれど、たぶんそれは本心のすべてじゃないんだろう。私が喘ぎ悶えて乱れる様を見たいというのがその半分以上を占めているハズだ。だってそうじゃなきゃ、こんなにニンマリとして舌なめずりをする顔なんてしないだろうから。

「もっと夢中にさせてあげますね♡ あうんたちで♡♡」

「あうん、たち……?」

そんな魔性の狎犬が、聞き落とすことのできないような言葉を囁いていった。それはまるでほかの誰かがこの場にいますかのような物言い、私は今の情けない姿をあうん以外の者に見られてしまったのかと起き上がり身を硬くさせていく。

でもそれは、幸か不幸かただの勘違いでしかなかったらしい。

「そうですよお♡ 忘れちゃったんですか？ 私はふたりになれるんだってこと♡♡」

「……っ!!」

気が付くと、身体が背後から誰かに抱きすくめられていた。すっかり馴染んで覚えてしまった大きくてボリリューム感たっぷりの弾力が背中で潰れていて、全身が柔らかな体温としっとりとした匂いに包み込まれていた。

「今日はあ、ふたりで気持ちよくしてあげますねえ♡♡」
後ろから囁きかけられてくる聞き慣れた声。振り返って
いけば、そこでもネットリと目を細めている狛犬少女の姿があつて、私は気を動転させながら心臓を大きく跳ねさせていく。

「あはっ♡ 霊夢さんのおちんちん、ビクビク震えだしてきちゃいましたね♡♡」

「今からしてもらうこと、期待しちゃってるんですかあ？♡」
「い、や……そんなっ これは、ちがくて……あああっ」

すりゅ♡ くにくゅ♡ にゅくうう……♡♡

正面から、背後から、ニマニマとした視線が注がれてくる。

それと一緒に手が伸びてきて、限界寸前のオス肉が絡め取られていく。張り詰めきっている怒張が、引きつる小玉を納める肉袋が、さわさわと撫で回されていく。

「クネクネして逃げようとしてもダメ♡♡ 離してなんてあげませんから♡♡」

「霊夢さんの弱点はあ、みーんな覚えちゃってるんですからね♡♡」

両手を使って根元から先端までを握られた竿が、ニュコニュコと絞りしごかれていた。私からこぼれた先走り汁で濡れているソコは、ヌリユヌリユとした感触の中で妖しく締め付けられていく。

もうひと組の手は、脚の付け根をモゾモゾとまさぐりながら肉袋をてのひらの上で転がしてきていた。竿の根元やうちももに指を這わせつつ、巾着のシワを丁寧になぞり上げてきていた。

その囁きの通り、私の弱点を完全に知りつくした上での執拗な手淫。しかもそれはひとりの存在がふたりに分身してのことなのだから、呼吸もタイミングもピッタリ合った動きになっている。私が射精感をこみ上げさせれば手を止めて、落ち着きを取り戻せばまたまさぐりだしてきて、腰奥をグツ

グツと甘く煮えたぎらせてくる。

「エッチな陰陽玉、ずっしりしてきちゃいましたね♡♡」

肉袋をまさぐる背後の狛犬が、嬉しげに声を吹きかけてくる。

「夜の内に溜まっていた霊力、コツチに集まってきたちゃいましたね♡♡」

オス肉をしごく正面の妖獣が、熱い吐息と共に囁いてくる。

「あ、あああ…… お願い、もう……っ！」

度重なる寸止めで、もう気がおかしくなりそうだった。

一对の淫らな狛犬に囲まれて、なまめかしい空気に包まれて、私は腰を浮かせて背をよじらせてしまっていた。

もう射精^でしてしまう。バクハツ寸前で手を離されても、

ペニスは勝手に白濁をぶちまけてしまう気がする。

「じゃあ……とっておきを味合わせてあげますね♡」

でもそこまで追い詰められていながらも、身体は浅ましく期待を覚えておあずけに従っていつってしまった。正面から言われた「とっておき」とはどんなものなのかと、押し寄せてくる粘つきを必死に抑えこもうとしていったのだ。

「こうやって分身したのもお、こうしてあげるためだったんですから♡♡」

おかしげでイタズラっぽい声。それと同時に背後からの密着が解かれていき、目の前で一对の妖獣が並んでいく。同じ顔、同じ声、同じ身体つきをしたふたりの少女。そんな彼女たちが、あらわにさせている豊乳をことさら誇示して強調させるように胸を反らしてみせてくる。

「な、なにをする気で……」

ゴクリと喉が鳴っていった。イヤな予感と、何かを期待する気持ちが同時に湧き膨らんできてしまった。

思わずそんな言葉がもれていったけど、今からどんなことをされてしまうのかはもう解ってしまった。ボリューム感たっぷりの膨らみを持つ少女が、ふたり並んでその豊乳を誇らしげに見せつけてきている…… そうとなれば、何が始まるのかなんておのずと察しがついてしまう。

「もちろん、霊夢さんを喜ばせてあげることですよ♡」

「いつもいつも霊夢さんがコッソリ見てた、あうんのおっぱいを使ってあげちゃいます♡」

「あ、あ…… そんな、ふたりでなんて……っ」

その大きな肉の毬で挟んでもらうことは今まで何度も味わわれてきた。なんならついさっきだって、もっちりとしていてすべすべな柔乳の中にペニスを包み込んでもらえ

ていた。

だけど今度は、ふたりのあうんから同時にそれを味合わせられることになる。ひとりですられるだけでも私はすぐに屈伏させられてしまうというのに、それがふたりがかりとなったらどうなってしまうんだろう。

「見ててくださいねえ♡ 霊夢さんのおちんちんが、あうんたちに捕まえられちゃうところ♡♡」

元が同一の人物なのだから、タイミングを揃えようと示し合わせる必要もない。淫らな狎犬たちはアイコンタクトをとることもなく左右から大きなマシユマロ肉を寄せ合わせてくる。先端でぷくりと膨らんだグミキャンディを肉竿に触れさせるようにしながら、たっぷりとした乳肉で私をむにゅりと押し潰してくる。

ぷ、にゅん♡ もにゅ♡ にゅ、むううう……っ♡♡

「ふ……ああああああっ♡♡」

もちもちとした特上の大福に閉じ込められて、包み込まれて、腰が勝手にガクついて浮き上がっていった。白い弾力に柔らかく圧迫されながら、軟弱な棒肉が悲鳴を上げるように跳ね震えていった。

「わあ、霊夢さん射精さず^だにガマンできましたねえ♡」

「もう今にもバクハツしちゃうそうだったのに、とっても頑張り屋さんです♡♡」

「だめっ、だめえっ じっとしてて！ そのままにしてて！ 今、動かれちゃったらああああっ♡♡」

これで果ててしまわなかったのは自分でも不思議だった。まるでお湯を垂らされた角砂糖のように理性はグズグズになっただけで、それでも簡単には屈さないようにというプライドが残っていたんだろうか。それとも……

「でももしかしてえ、すぐに射精^だしちゃもったいないからってガマンしてるのかなあ♡」

「欲張りさんですねえ♡ そんなことしなくても、あうんたちがいっぱいにもにゅもにゅぎゅむぎゅむしてあげるのに♡♡」

「……っ」

こうして煽られている通りのことが本心では大きかったんだろうか。私は左右から視線を注いでくる妖獣たちにねっとり囁きかけられて、心を覗かれたような羞恥に駆られてしまう。

「どっちでもいいですよ♡ ぷにゅぷにゅおっぱいでたっぷり可愛がってもらって、何度もびゅくびゅくーって

しちゃうのでもいいですしい……♡♡」

「いーっぱいガマンしてネバネバ靈力たあくさん溜め込んでえ……♡ おっぱいの間からぶびゆるるーってたっぷり噴き出しちゃうのも気持ちいいですもんねえ♡♡」でも、そんなことどうでもいいことではなかった。精を貪る淫魔同然になった妖獣たちは、私のことなんてお構いなしに張り詰め肉をこね潰してくる。一對の狛犬たちは完璧に呼吸を合わせて、重量感たっぷりな白い肉餅を押し付けすり合わせてくる。

むにゅ♡ ぬりゅ♡ すりゅ、にゅむっ♡

くりゅくりゅくりゅくりゅうううう……っ♡♡

つきたてのお餅が竿肌に吸いつきながら上下に揺らされてくる。垂れ流しっぱなしな先走りのせいで乳肌はすっかりヌルついていて、ピッタリとした密着感を味合わせながら私を絞りたててくる。

先端の敏感なブブンでは、プニプニとした肉の粒がソコをこねくり回してきていた。刺激に弱い穂先が二粒のサクランボの中で転がされて、背筋や脳がピンク色の電流で甘く焼き焦がされていた。

「ひっ、あっ♡ はひっ、あひっ……♡ もう、れちゃうっ

くりゅの、きちゃうのおっ 朝勃ちちんぽからっ、できたてのせーえき、あふれちゃうのおおおっ♡♡」

腰が浮く。脚が伸びきる。袋の中では小玉が引きつり、下半身は物欲しげにへこついて、屈伏の白濁を噴き出させてほしいとおねだりをしていく。

「えへへっ 感じて喘いじゃってる靈夢さん、可愛いです♡ あうん、嬉しくなっちゃいます♡♡」

「あはっ、靈夢さんってば泣き言こぼしちゃって可愛い♡ あうん、楽しくなってきた♡♡」

どんなことでも受け入れてくれる、慈愛に満ちた顔がある。心をつついてくるような、ニマニマとした挑発的な顔がある。

左右でそれぞれ違う表情をした妖獣たちが、正反対の声色で、囁きで、私を追い詰めてくる。

「や……っ♡ いや……っ♡ そんなこと、されたら……へんになりゅっ あたま、ダメになりゅ♡♡ ダメになりながら……びゅーびゅーしちゃうのおお♡♡」

「射精して♡ 射精してっ♡♡ あうんに、あつあつ靈力ミルク浴びさせてっ♡♡」

「射精ーせ♡ 射精ーせっ♡♡ あうんのこと、やーらしい

ネバネバで汚しちゃえ♡♡」

ず、くん……っ

腰の奥でなにかが崩れた。それは、限界ギリギリまで精液を溜め込んだ堤防が決壊した瞬間であって……

「ひっ、あ……っ♡ や、ああああああっ♡♡」

ど……びゅっー！びゅんぬんぬん

びゅぶ、ぐびゅっ…… びゅんぬんぬん……っ

私はもっちりとした重たい肉大福に左右から潰されながら、溜まりに溜まった灼熱の白濁を思いきりぶちまけさせていってしまうのだった。

「ん、くうっ♡ 射精^でてる、あふれてる……♡♡ あうんたちのおっぱいの中から、びゅーって……♡ 頼もしいおちんちんです♡♡」

「あーあ、射精^だしちゃった♡ 負けちゃった♡♡ あうんたちが相手じゃなかったら、弱虫おちんちんって笑われちゃいますね♡♡」

「ふ、あ…… は、へえ……♡♡」

ニッコリと笑う無邪気な顔。ニンマリとした征服感に満ちた顔。

対称的な表情を、囁きを向けてくる狒犬ふたりの乳肉の

間で、弱虫な怒張が白濁をびゅくびゅくと噴き出している。重たく柔らかくピッタリと密着してくる一対の乳肌の合わせ目から、青臭い粘液があふれだしてきている。

「今日も上手に射精^だせましたね、霊夢さん♡」

ぬちゅ♡ ねと♡ どころお……♡♡

やがて脈動と噴出がひと息ついていったところで、甘い表情をしたほうの狒犬が圧迫を弱め、私を解放してくれた。「昨日の夜も射精^ださせてあげたのに、こんなにデロデロにさせちゃって……♡ 寝てる間にどれだけ霊力溜めちゃってたんですか♡♡」

たぷんと揺れながら離れていく、ふたりの特大バスト。それはダマを作るくらいに濃厚なオス汁にまみれてヌトヌトと汚れてしまっている。思わず顔をそむけなくなるくらいに青臭い白濁は、乳肉の間でクモの巣のように糸を引きながら重たげな雫をしたたらせていく。

これまで何度、あうんの身体をこうして汚してきただろう。けれど何回見てもこの光景に慣れることなんてできなくて、私は羞恥心と罪悪感をこみ上げさせてしまう。

「えへへ、やっぱりこうやって搾ってあげるようにして正解でしたね♡♡ そうじゃないとエッチな妖怪の色香に

あてられて霊夢さん負けさせられちゃってますもん♡♡」

「あうんだから許してあげるんですからね♡ あうん以外の女性にびゆくびゆくしちやダメですからね♡♡ 霊夢さんのよわわおちんちんは、あうんが護ってあげるんですから♡♡」

「う、うう…… あ、ありがとう、ございます……くうっ」

そして今回もまた、白濁汁はいつものように指ですくい取られ、そのまま妖獣の口へと運ばれていってしまう。私の吐き出した精液は、まるで生クリームをつまみ食いするかのようになちゅばちゅばとしやぶられて飲み込まれ、あうんのお腹へと納められてしまうのだ。

「んっ♡ できたての霊力がたっぷり美味しい……♡♡」

「お腹の中、ぼかぼかしてきて…… アソコもウズウズしてきちゃう……♡♡」

精気に飢えた淫魔の顔がそこにあった。頬を染め、ねつとりと目を細め、唇を精液でヌラつかせたサキュバスふたりが舌なめずりをしていた。

もうわかってる。私がこれからどうなるのかということなんて。この淫らな行為がこれだけで終わるハズなんてなくて、今から私は彼女たちの貪欲な膣壺でねつとりと

たっぷりと精液を吸い吸われることになるのだ。

「まだ、射精^だせますよね♡」

期待を覚えて首をもたげだしてしまおうオス肉。それを見ながら、甘い顔をするほうの狒犬が私を後ろから抱きすくめてくる。

「もう射精^だせない、なんて言わせませんからね♡♡」

飲み込んだ白濁の温かさを味わうように、お腹を撫でてみせている挑発的なほうの妖獣。その彼女が、征服感でいっぱいな表情で腰上へ跨りかかってくる。

「ふ、あ…… 私っ……♡」

ちゅ、く……っ♡

まるで粘膜がとろけているかのような、温かで甘いぬかるみ。その肉の沼に敏感な穂先があてがわれていく。閉じ合っている肉のフリルが、愛液をヨダレのように垂らしながら私を捕らえ頬張っていく。

もう逃げられない。もうこのまま彼女の粘膜壺にぐっぷりと啜え込まれるだけ……

「いっぱい気持ちいいことしましうね♡」

「一滴残らず搾ってあげちゃいますからね♡♡」

「し……してっ♡ 気持ちいいこと、してっ♡ 私の弱虫

おちんぽから、全部全部搾りだしてええええつつ♡♡」

ず……にゅっ♡ にゅるるる……ぐっぱんっ♡♡

そして、完全に屈伏してしまった叫びを上げていった瞬間に。浅ましい欲情に引きつる肉竿は甘い体重を乗せられていき、それこそ吸い込まれていくように膣壺の深くまで啜え込まれてしまったのだった。

ニルニルと、意思を持つかのようにまとわりついてくる無数のヒダ肉。きゅうきゅうと、抱きついてくるようにすぼまってくる膣壁。温かくて甘い蜜でたっぷりな媚粘膜に密着されながら、私は早くも熱く粘つく靈力を淫らな狍犬の吸精器官へと捧げ注いでいくのだった……

あうシコした人達



裏喝庵(叢喝庵)

この度はあうんちゃん合同にお誘いいただき、
ありがとうございました！
あうんちゃんの可愛さと、秘めたるエロさに
脳を焼かれていた頃に、
ジャストフィットの素晴らしい企画。
何を描くか迷った結果、
やはり暑い中寝てる
ムチムチあうんちゃんがいいな…と
成人向けじゃない絵の方も
描きたいな~とったり……
第二弾あうんちゃん合同も期待！



あうんちゃん、初めて描きました。
参加を決めてから阿吽の射精を
させると決めてました。
描くの難しいけど可愛いね……！
ありがとうございました！

NARUN.

正真正銘初参加と初投稿です。
他よりは見劣りしますが、
自分の全力を出して描けたと思います。
またいつか機会があればお会いしましょう。

もっと上手くなったら
合同誌企画したいなー

ネオフレ



あうんちゃん合同
参加させていただき
ありがとうございました！
なんだかIQが下がり
そうな漫画になって
しまいました…

あうんちゃんはマスコットの
的な感じにしたりセクシー
にもできたり描き手で
面白くなるキャラで
描いて楽しかったです！

ちびドラ

X: Chibi dora
Pixiv: 1439633



この本を知りしに
けだちの欲も
満たされるのを
いのでます。

さなこ



あうんちゃんに
応援されたい

って思いながら
描きました

くらやみ

いっ子の妖怪その2かよ…
その1は小傘ちゃんその3は美宵ちゃん

初めて合同誌に参加させて頂きました。
というか、ちゃんと漫画描いたのが初です。
最初このやり方で大丈夫かなと思って描き進めたら
上手く行かず、ほぼ全体を描き直しになったり…。
色々勉強になりました。たった6Pなのに書きから完成までに7ヶ月かかったよ。
ありがとうございました。
あうんちゃんにシコレ。

BEN

Twitter: @BEN_tttt_echi
pixiv: 107469256

ぴあき 未す
おじやアリガトネ!
仮にちんちんさせると
健康に良い めんせいのね
2730シネ! ぴあき yet! ぴあき

今回も楽しく描きました♡
あうんちゃんって
スケベだったんだなあ…♡



春藤平四郎

濡れ透け、とても
ドスケベじゃないですか!
そのお洋服が色落ち
するまで濡れしす。 風邪には
気を付けてね。 龍鶴

神社の風紀が乱れる!!!
サークル「無色酒」代表の
しろわいんです。
あうんちゃんは何んというか
全身柔らかそうですよね
撫で回したい
本編のGOOD END条件は
「霊夢の欲情ゲージが80以上で
イベントを発生させる」です

まんまる眉なあうんちゃんの
スケベな姿をたくさん描けて
とても楽しかったです。
ありがとうございました。
えふけい



あとがき…… by S.A.村井
狛犬っておちんちんがついてる
タイプがときどきいるんですよ
ね。捗りますよね。素敵な合同
企画感謝です…!



初めておっぱい描きました

ぽぽぽ



高麗野あうんは、
エッチだった。
ある証言者の記録

フーポ

@huupoppo_02

お誘いいただきありがとうございます
 本当は霊夢さんとあうんちゃん絡ませ
 たかったんですが「あう×霊」は自分の中で
 純愛派なのでページ数の兼ね合いもあり
 同居人のくらびーと犬っぽい感じで
 水遊びをしてもらうことになりました
 あうんちゃんは霊夢さんにクソデカ
 感情を抱いてるので
 童貞みたいなムーブ
 してほしいなって
 いう妄想でした

おねだり



何を描くかいろいろ迷いましたが
 自分の性癖を抑えきれず
 神社で露出オナニーになりました。



あうんちゃんに
 神社の縁側や裏手で
 ガニ股露出オナしたり
 寝てる霊夢のそばで
 こっそりオナって欲しい...

ザック

最高にえっちな合同にお誘いいただき
 ありがとうございます。初めてえっち
 なマンガ描きました。えっちなマンガ
 難しいですね。もっとえっちなマンガ力を
 高めてえっちなあうんちゃんリベンジ
 したいです。えっちなあうんちゃん最高。

べにいもエロヌ

表紙イラストも
 描かせてもらえて
 めっちゃ嬉しかった
 です！感謝！！

えっちな
 6回も
 言ってる...



合同主催ありがとうございます！

普段あまり描かない
 えっちな漫画ですが、
 とても楽しく書かせ
 て頂きました！

もっと色々
 描きたいー！

ゆうたいし



あうんちゃん！
 えっちなだね！

エヤブス



宵闇鳥様の合同誌寄稿も通算4冊めを数えました。
 拝読ありがとうございます。

エンジェルダスト



あうんちゃんが…あんないい子が
 すけべな幻想郷に入れないなんて…
 独りぼっちだなんて…そんなの…
 そんな事！ あってたまるかよッ！
 俺達が証明してやるんだ！
 あうシコは特殊性癖なんかじゃない
 皆に届くものなんだって…！

はにわはお/はむらび14(@ban2c)

あうんちゃん初描きですが
 楽しかったです



PN：虚無

Twitter(X)…zerokyomu



エッチ漫画童貞をあうんちゃんに捧げる
 ことになるとは…貴重な場を頂き
 ありがとうございます。
 あうんちゃんのカワイイ♡ ほほぽん

お誘い頂き
 ありがとう
 ございました!!
 ぽぽー



「見せつけ・攻め・受け・オナニー・搾精」のイラストを通常・ふたなりの2ver.で描きました。

性欲に従順なあうんちゃんも素敵ですが、個人的には巻き込まれている風に見せかけて実はノリノリな霊夢さんがとてもえっちだと思います。

宵闇鳥さんへ
ご参加させていただきありがとうございました。
読んでくださった方へ
読んでいただいて誠にありがとうございました。

00sec.s

人生の「徳」は
大きいおっぱいを
描くとゲージ上昇
します。

74バサ



霊夢ちゃんと生えてるあうんちゃんが
なかよくする漫画となりました。特に書くことは無いので描かなかったことでも語りますがあうんちゃんは霊夢ちゃんに悪い妖怪を懲らしめるようにおつかいを頼まれていました。こらしめれいぶで山犬のえのこちゃんをわからせたあとって感じで始めるつもりでしたがそうするとその後に霊夢ちゃんと生おせせするとちょっとあれかなあと思ったりあうんちゃんのその日の一番汁を受け止めてくれる霊夢ちゃんが描けなくなるなあということでこうなりました。ではまたどこかで！
サークル：メタグロスタイガー めたぐろ

つるなり

あうんちゃん合同参加させていただきました。
はじめての漫画制作しかもはじめてのスケベ絵でしたが楽しく制作できました。
普段の絵柄だとスケベ絵との相性が悪く迷走していましたが何とか形にはなりました。

今回の合同誌で腹部と舌出しという新しい自分の癖にも出会えましたので今後はそういったジャンルにも手を出していきたいですね。

あうんちゃんスケベ本

ヤッター！！
おん

巨乳エロボディ
あうんちゃん＆
ふたなり霊夢の
組み合わせを
考えた人は神

しも
とも



霊夢
「あうんちゃんを攻略しようと思ったら
114514回やり直しちゃったわ…」

あとがきに霊夢で野獣先輩のイキ顔描こうと思ったけど殺害予告来るといけないから止めた



宵闇鳥

こんにちは、奈津みかんです
今回お誘いいただきありがとうございます(大声)
あうんちゃんかわいいですよ♡
主従関係が逆転するの好き好き♡
ということで描かせて
いただきました！
あうんちゃんに
飼われたい…♡
色んな可能性持ってますよね
描く前の印象はかわいいなあど
思ってたんですが描いてたら
なんだドスケベじゃないか～♡
あうんちゃんあうんちゃん！！おうほ♡♡♡♡♡
Twitter: natsumikan_jell Pixiv: 12716543

参加させていただきありがとうございました！
流行りの(?)おっきなあうんちゃんと
ふたなり霊夢が描けて満足です！

石田



今回の話は、静岡例大祭で出した
「たゆぽよあうんちゃんとかよわよわ
霊夢ちゃん」で盛り込めなかった
分身あうんちゃんのWパイズリ要素
で書いてみました。

よわよわちんちん霊夢ちゃん概念、
すっかり定着しちゃいましたね。

最高なのでもっと広まれ！

寺座 わたがし

せっかくのあうんちゃんなので、
二名義両方で出しました。

俺が一对の神獣だ。

ちちち/さささ

-奥付-

『博麗神社のHな狛犬合同』

発行者：宵闇鳥

連絡先：yoiyamitori@gmail.com

発行日：2025/10/12(東方紅楼夢21)

印刷：ねこのしっぽ 様

原作：上海アリス幻楽団

東方project

-無断転載及び複製を禁止します-

参拝者一覧(敬称略)

エンジェルダスト

エヤプス

BEN

べにいも エロヌ

しろわいん

龍鶴

NARUN.

ウラザサ

お紙

ネオフレ

ザック

奈津みかん

00sec.s

寺座綿菓子

THおんと

ちちち&さささ

ひつつ

鹿味噌

ともきとものり

宵闇鳥

めたぐろ

春藤平四郎

TERA

ちびドラ

はにわはお

ぴあき

ゆうたいし

フーポ

ぱにぱに

タチバナ

つるなり

虚無

arososo

えふけい

S.A.村井

石田

茹でピー

裏喝庵

さなここ

ぽぽぽん